



Sun™ ONE Studio 5, Standard Edition インストールガイド

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No. 817-3301-10
2003 年 7 月, Revision A

Copyright © 2003 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. は、この製品に組み込まれている技術に関連する知的所有権を持っています。具体的には、これらの知的所有権には <http://www.sun.com/patents> に示されている 1 つまたは複数の米国の特許、および米国および他の各国における 1 つまたは複数のその他の特許または特許申請が含まれますが、これらに限定されません。

本製品はライセンス規定に従って配布され、本製品の使用、コピー、配布、逆コンパイルには制限があります。本製品のいかなる部分も、その形態および方法を問わず、Sun およびそのライセンサーの事前の書面による許可なく複製することを禁じます。

フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権法により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Forte、Java、NetBeans、iPlanet および docs.sun.com は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC の商標はライセンス規定に従って使用されており、米国および他の各国における SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。SPARC の商標を持つ製品は、Sun Microsystems, Inc. によって開発されたアーキテクチャに基づいています。

サンのロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

Federal Acquisitions: Commercial Software -- Government Users Subject to Standard License Terms and Conditions

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含み、明示的であるか黙示的であるかを問わず、あらゆる説明および保証は、法的に無効である限り、拒否されるものとします。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法(外為法)に定められる戦略物資等(貨物または役務)に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典：	<i>Sun ONE Studio 5, Standard Edition Getting Started Guide</i> Part No: 817-2318-10 Revision A
-----	---



目次

はじめに vii

1. インストールの準備 1
 - インストール作業の概要 2
 - サポートされるプラットフォーム 3
 - システムおよびディスク容量の要件 3
 - ディスク容量要件 4
 - J2SE プラットフォームの確認 6
 - 以前のソフトウェアリリースのサポート 8
 - 適切なユーザー特権 8
2. IDE のインストール
(Microsoft Windows システム) 11
 - GUI インストーラの使用 11
 - インストール時のコマンド行オプションの使用 14
3. IDE のインストール
(Linux システム) 15
 - GUI インストーラの使用 15
 - インストール時のコマンド行オプションの使用 18
4. IDE のインストール(Solaris OS) 19

- Solaris 8 OS パッチの適用 19
- GUI インストーラの使用 22
- インストール時のコマンド行オプションの使用 25

- 5. IDE の設定 27
 - IDE の起動 27
 - IDE の設定 28
 - 設定インポートウィザード 29
 - 登録ウィザード 29
 - 設定ウィザード 29
 - 起動オプションの使用 30

- 6. IDE での Sun ONE Application Server の使用 33
 - 管理ドメインの理解 33
 - デフォルト管理ドメインの使用 34
 - 各ユーザーの管理ドメインの作成 37
 - Sun ONE Application Server 7 の使用 42

- 7. IDE のインストールの検証 45
 - J2EE プラットフォームアプリケーションの作成 45

- 8. IDE でのデータベースの使用 49
 - PointBase 接続の設定 49
 - PointBase サーバーとコンソールの使用 54
 - 他の JDBC 対応データベースの利用 55

- 9. IDE での BEA WebLogic Server の使用 57
 - WebLogic 環境の構成 57
 - マルチユーザー環境の WebLogic サポート 61

- 10. インストールのアップグレード 63

アップデートセンターを利用したモジュールの更新	63
「ライセンスマネージャ」ツールの使用	64
11. IDE のアンインストール	67
アンインストーラの使用	67
12. 障害追跡	73
solaris_patch_installer を使った Solaris 8 OS パッチインストール時の問題	74
IDE インストール時の問題	75
IDE 起動時の問題	80
「スタート」メニュー項目使用時の問題 (Microsoft Windows プラットフォーム)	81
Web サービス実行時の問題	81
UDDI を使用する Web サービス実行時の問題	83
WebLogic 6.1 または 7.0 使用時の問題	84
不完全なアンインストールの識別と修正	84
A. Solaris 8 OS パッチの番号と説明	91
B. IDE におけるポート使用	93
C. IDE のサブディレクトリ	97
インストールサブディレクトリ	97
IDE ユーザーサブディレクトリ	98
D. IDE インストール用のコマンド行オプション	99
GUI インストーラで使用されるコマンド行オプション	100
J2SE プラットフォームの場所の指定	100
一時空き領域ディレクトリの場所の指定	101
エラーメッセージのログファイルの指定	101
サイレントモードでの IDE のインストール	101

Web ダウンロードを使ったサイレントモードのインストール 102

CD-ROM を使ったサイレントモードのインストール 105

索引 109

はじめに

このマニュアルでは、Sun™ ONE Studio 5, Standard Edition 統合開発環境 (IDE) のインストールと設定、起動方法を説明しています。このマニュアルは、ソフトウェアのインストールを行うシステム管理者および開発者の両方を対象読者としています。読者は、ご使用のプラットフォームの基本的なインストール手順の実行経験が必要です。

画面イメージおよびコマンド行で入力するコマンドはプラットフォームによって少し異なります。たとえば、Microsoft Windows のコマンドは次のようになります。

```
c:>cd MyWorkDir\MyPackage
```

UNIX の場合は、次のようになります。

```
% cd MyWorkspace/MyPackage
```

お読みになる前に

読者は、今回のリリースの Sun ONE Studio 5 IDE で使用するプラットフォームへのソフトウェア製品のインストールおよびアンインストール方法をよく理解しておく必要があります。たとえば、次のようなシステム管理コマンドの知識が必要です。

- Solaris™ オペレーティングシステム (Solaris OS) の `su`、`xhost`、`pkginfo`、`pkgadd`、`pkgrm` ユーティリティ
- Microsoft Windows システムの「プログラムの追加と削除」ユーティリティ

- Linux 環境の rpm コマンド

使用環境のシステム管理コマンドについて不慣れな場合は、このガイドを読むにあたって適宜システム管理者に問い合わせてください。

このチュートリアルを学ぶにあたっては、次の知識があることが前提になります。

- Java™ プログラミング言語
- Enterprise JavaBeans™ (EJB™) の概念
- Java™ サンプルコード構文
- JDBC™ API 対応のドライバの構文
- HTML 構文
- JavaServer Pages™ 構文
- JDBC データベースの使用法
- Java™ 2Enterprise Edition (J2EE™) のアセンブルと開発の概念
- Web サービス
- Sun™ ONE Application Server 7, Standard Edition などのアプリケーションサーバーの使用法

また、次に示すような J2EE の概念に関する一般的な知識が必要です。

- Java 2 Platform, Enterprise Edition Blueprints
<http://java.sun.com/j2ee/blueprints>
- Java 2 Platform, Enterprise Edition Specification
<http://java.sun.com/j2ee/download.html#platformspec>
- The J2EE Tutorial
<http://java.sun.com/j2ee/tutorial>
- Java Servlet Specification Version 2.3
<http://java.sun.com/products/servlet/download.html#specs>
- JavaServer Pages Specification Version 1.2
<http://java.sun.com/products/jsp/download.html#specs>

さらに、Java API for XML-Based RPC (JAX-RPC) の詳細に精通していると役立ちます。詳細は、以下を参照してください。

<http://java.sun.com/xml/jaxrpc>

注 - Sun では、本マニュアルに掲載した第三者の Web サイトのご利用に関しましては責任はなく、保証するものでもありません。また、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイト、リソースから利用可能であるコンテンツ、広告、製品、あるいは資料に関して一切の責任を負いません。Sun は、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイトから利用可能であるコンテンツ、製品、サービスのご利用あるいは信頼によって、あるいはそれに関連して発生するいかなる損害、損失、申し立てに対する一切の責任を負いません。

書体と記号について

書体または 記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コーディング例。	.cvspass ファイルを編集します。 DIR を使用してすべてのファイルを表示します。 Search is complete.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表わします。	> login Password:
AaBbCc123 または ゴシック	コマンド行の変数部分。実際の名前または実際の値と置き換えてください。	削除するには DEL filename と入力します。 rm ファイル名 と入します。
『』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照してください。 これらは、「クラス」オプションと呼ばれます。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を越える場合、バックスラッシュは、継続を示します。	machinename% grep `^#define \ XV_VERSION_STRING`
▶	階層メニューのサブメニューを選択することを示します。	作成: 「返信」▶「送信者へ」

シェルプロンプトについて

シェル	プロンプト
UNIX の C シェル	machine_name%
UNIX の Bourne シェルと Korn シェル	machine_name\$
スーパーユーザー (シェルの種類を問わない)	#

関連マニュアル

Sun ONE Studio 5 のマニュアルは、Acrobat Reader (PDF) ファイル、リリースノート、オンラインヘルプ、サンプルアプリケーションの `readme` ファイル、Javadoc™ 文書の形式で提供しています。

オンラインで入手可能なマニュアル

以下に紹介するマニュアルは、Sun ONE Studio 開発者リソースポータル のドキュメントサイト (<http://sun.co.jp/software/sundev/jde/documentation/>) および `docs.sun.com`™ (<http://docs.sun.com>) から入手できます。

`docs.sun.com` Web サイトでは、サンのマニュアルをインターネットを通じて閲覧、印刷、購入することができます。サイト内でマニュアルを見つけられない場合には、製品と一緒にローカルシステムまたはローカルネットワークにインストールされているマニュアルインデックスを参照してください。

■ リリースノート (HTML 形式)

Sun ONE Studio 5 の Edition ごとに用意されています。このリリースでの変更情報と技術上の注意事項を説明しています。

- 『Sun ONE Studio 5, Standard Edition リリースノート』

- インストールガイド (PDF 形式)

対応プラットフォームへの Sun ONE Studio 5 統合開発環境 (IDE) のインストール手順を説明しています。さらに、システム要件、アップグレード方法、アプリケーションサーバーの情報、コマンド行での操作、インストールされるサブディレクトリ、Javadoc の設定、データベースの統合、アップデートセンターの使用方法などが含まれます。

- 『Sun ONE Studio 5, Standard Edition インストールガイド』
- 『Sun ONE Studio 4, Mobile Edition インストールガイド』

- Sun ONE Studio 5 プログラミングシリーズ (PDF 形式)

Sun ONE Studio 5 の各機能を使用して、優れた J2EE アプリケーションを開発するための方法を詳細に説明しています。

- 『Web コンポーネントのプログラミング』

JSP ページ、サーブレット、タグライブラリを使用し、クラスやファイルをサポートする Web アプリケーションを J2EE Web モジュールとして構築する方法を説明しています。

- 『J2EE アプリケーションのプログラミング』

EJB モジュールや Web モジュールを J2EE にアSEMBルする方法を説明しています。また、J2EE アプリケーションの配備や実行についても説明しています。

- 『Enterprise JavaBeans コンポーネントのプログラミング』

Sun ONE Studio 5 の EJB ビルダークウィザードや、他の IDE コンポーネントを使用し、EJB コンポーネント (コンテナ管理や Bean 管理の持続性の機能を持つセッション Bean やエンティティ Bean、メッセージ駆動型 Bean) を作成する方法を説明しています。

- 『Web サービスのプログラミング』

Sun ONE Studio 5 IDE を使用して Web サービスを構築したり、UDDI レジストリを経由して第三者に Web サービスを利用させたり、また、ローカル Web サービスや UDDI レジストリから Web サービスクライアントを生成する方法などを説明しています。

- 『Java DataBase Connectivity の使用』

Sun ONE Studio 5 IDE の JDBC 生産性向上ツールを使用し、JDBC アプリケーションを作成する方法について説明しています。

- Sun ONE Studio 5 チュートリアル (PDF 形式)

Sun ONE Studio 5, Standard Edition の主な機能の活用方法を紹介しています。

- 『Sun ONE Studio 5 Web アプリケーションチュートリアル』

簡単な J2EE Web アプリケーションの構築方法を順を追って解説します。

- 『Sun ONE Studio 5 J2EE アプリケーションチュートリアル』

EJB コンポーネントと Web サービス技術を使用したアプリケーションの構築方法を順を追って解説します。

- 『Sun ONE Studio 4, Mobile Edition チュートリアル』

携帯やPDA 端末などの無線機器を対象とした簡単なアプリケーションの構築方法を順を追って解説します。このアプリケーションは Java 2 Platform, Micro Edition (J2ME™ プラットフォーム) に準拠し、Mobile Information Device Profile (MIDP) と Connected, Limited Device Configuration (CLDC) を満たすものです。

チュートリアルアプリケーションは、以下のサイトからもアクセスできます。

<http://forte.sun.com/ffj/documentation/tutorialsandexamples.html>

オンラインヘルプ

オンラインヘルプは、Sun ONE Studio 5 IDE から参照できます。ヘルプを開くには、ヘルプキー (Windows および Linux 環境では F1 キー、Solaris オペレーティング環境では Help キー) を押すか、「ヘルプ」->「内容」を選択します。ヘルプの項目と検索機能が表示されます。

プログラム例

Sun ONE Studio 5 の機能を紹介したプログラム例とチュートリアルアプリケーションを、以下の Sun ONE Studio 開発者リソースのポータルサイトからダウンロードすることができます。

<http://forte.sun.com/ffj/documentation/tutorialsandexamples.html>

このチュートリアルで使用するアプリケーションも上記サイトに収録されています。

Javadoc

Javadoc 形式のマニュアルは、Sun ONE Studio 5 の多くのモジュールに用意されており、IDE の中で参照できます。このマニュアルの使用方法については、リリースノートを参照してください。

技術サポートへの問い合わせ

製品についての技術的なご質問がございましたら、以下のサイトからお問い合わせください (このマニュアルで回答されていないものに限ります)。

<http://sun.co.jp/service/contacting>

第1章

インストールの準備

この章では、Sun™ ONE Studio 5, Standard Edition IDE をインストールする前に必要な情報を提供します。Sun ONE Studio のこのリリースには、Sun™ ONE Application Server 7, Standard Edition と PointBase Server 4.2 Restricted Edition (PointBase) が含まれています。Sun ONE Studio インストーラによってこれらの製品をインストールすると、J2EE の概念を使って Java™ プログラミング言語で記述されたアプリケーションを開発して配備するためのエンタープライズレベルの統合ツールが提供されます。

この章は、以下の節で構成されています。

- 2 ページの「インストール作業の概要」
- 3 ページの「サポートされるプラットフォーム」
- 3 ページの「システムおよびディスク容量の要件」
- 6 ページの「J2SE プラットフォームの確認」
- 8 ページの「以前のソフトウェアリリースのサポート」
- 8 ページの「適切なユーザー特権」

インストール作業の概要

この節では、Sun ONE Studio IDE をシステムにインストールして構成する作業の概要を説明します。

表 1-1 IDE のインストールと構成の概要

作業	作業の説明
使用するプラットフォームがサポートされていることを確認します。	3 ページの「サポートされるプラットフォーム」
システムおよびディスク容量の要件を確認します。	3 ページの「システムおよびディスク容量の要件」
(Solaris のみ) 必要な Solaris パッチをインストールします。	19 ページの「Solaris 8 OS パッチの適用」
必要なバージョンの J2SE プラットフォームにアクセスできることを確認します。	6 ページの「J2SE プラットフォームの確認」
IDE をインストールするための適切なアクセス権があるかどうか判断します。	8 ページの「適切なユーザー特権」
以前のバージョンの IDE を残すかどうかを決定します。	8 ページの「以前のソフトウェアリリースのサポート」
IDE をインストールします。	<ul style="list-style-type: none">• 11 ページの「IDE のインストール (Microsoft Windows システム)」• 15 ページの「IDE のインストール (Linux システム)」• 19 ページの「IDE のインストール (Solaris OS)」
初期 IDE 環境を設定します。	27 ページの「IDE の設定」
(省略可能) Sun ONE Application Server 7 の構成を確認します。	33 ページの「IDE での Sun ONE Application Server の使用」
(省略可能) 簡単な J2EE アプリケーションを作成して、IDE のインストールの検証を行います。	45 ページの「IDE のインストールの検証」
(省略可能) PointBase を構成します。	49 ページの「IDE でのデータベースの使用」
(省略可能) WebLogic Server 環境を構成します。	57 ページの「IDE での BEA WebLogic Server の使用」

サポートされるプラットフォーム

The Sun ONE Studio 5, Standard Edition IDE は以下のプラットフォームでサポートされています。

- Microsoft Windows 2000 Professional
- Microsoft Windows XP Professional
- Red Hat Linux 7.2
- Solaris™ 9 OS (32 ビット/64 ビット、UltraSPARC® III)
- Solaris™ 8 OS (32 ビット/64 ビット、UltraSPARC® III)

システムおよびディスク容量の要件

表 1-2 は、サポートされているプラットフォームに IDE の最小構成をインストールするためのシステム要件をまとめています。

表 1-2 Sun ONE Studio 5, Standard Edition システム要件

サポートされるプラットフォーム	最小構成	推奨構成
Windows 2000、Windows XP	Pentium III、500 MHz 512 M バイト RAM	Pentium III、1GHz 768 M バイト RAM
Red Hat Linux 7.2	Pentium III 500 MHz 512 M バイト RAM	Pentium III、1GHz 768 M バイト RAM
Solaris 8、Solaris 9 オペレーティングシステム (32 ビット/64 ビット、UltraSPARC® プラットフォーム)	Ultra™ 60、450 MHz 512 M バイト RAM	Sun Blade™ 1000、750 MHz 1 G バイト RAM

これらは一般的なガイドラインです。システム要件は、Sun ONE Studio で使用するためにどのようなソフトウェアを追加インストールするかによって異なります。

ディスク容量要件

インストールのために必要なディスク容量は、IDE と Sun ONE Application Server の両方をインストールするか、IDE だけをインストールするかによって異なります。Sun ONE Studio IDE インストーラは、すでにシステムにインストールされている Sun ONE Application Server 7 と PointBase Server 4.2 Restricted Edition を検出します。

- インストーラが、システム内にインストールされている Sun ONE Application Server 7 と PointBase の両方を検出した場合は、Sun ONE Studio IDE だけがインストールされます。
- インストーラが、システム内にインストールされている Sun ONE Application Server 7 を検出し、PointBase は検出しなかった場合は、メッセージが表示されます。そのメッセージの内容は、既存の Sun ONE Application Server 7 をアンインストールした後で、再度 IDE インストーラを使用して、IDE と密接に統合された、PointBase を含む Sun ONE Application Server 7 を新たにインストールすることを推奨するものです。
- Solaris 9 update 2 OS では、IDE と密接に統合された、PointBase サーバーを含む Sun ONE Application Server 7 を 2 つめのコピーとしてインストールすることができます。

PointBase Server 4.2 Restricted Edition は、IDE とともに提供されているデフォルトのデータベースです。アプリケーションの構築と配備を直ちに開始できるように、このデータベースが提供されています。Sun ONE Studio の例とチュートリアルでは、このデータベースを使用する必要があります。

一時空き領域の要件

インストーラを実行するには、インストールファイルを展開するために十分な一時空き領域が必要です。

- UNIX[®] システムでは、インストーラは /tmp または /var/tmp ディレクトリを使用します。
- Microsoft Windows システムの場合は、インストーラは「システムのプロパティ」でユーザー変数 TEMP によって指定されたディレクトリを使用します。

プラットフォーム別の空き領域要件

必要な空き領域については、Microsoft Windows の場合は表 1-3 を、Linux システムの場合は表 1-4 を、Solaris OS システムの場合は表 1-5 を参照してください。

表 1-3 Microsoft Windows の場合に必要ディスク空き領域

ディレクトリ	Sun ONE Studio と Sun ONE Application Server 7	Sun ONE Studio のみ
<i>s1studio-install-directory</i>	450 M バイト	150 M バイト
「システムのプロパティ」のユーザー変数 TEMP で定義される一時空き領域	190 M バイト	190 M バイト

表 1-4 Linux OS の場合に必要ディスク空き領域

ディレクトリ	Sun ONE Studio と Sun ONE Application Server 7	Sun ONE Studio
<i>s1studio-install-directory</i>	485 M バイト	150 M バイト
/tmp (一時空き領域)	200 M バイト	200 M バイト
/etc/opt	2 M バイト	-
/var/opt	20 M バイト	-
/opt/imq	8 M バイト	-

表 1-5 Solaris OS の場合に必要ディスク空き領域

ディレクトリ	Sun ONE Studio と Sun ONE Application Server 7	Sun ONE Studio
<i>s1studio-install-directory</i>	550 M バイト	150 M バイト
/var/tmp (一時空き領域)	190 M バイト	190 M バイト
/usr	76 M バイト	-
/etc/opt	4 M バイト	-
/var/opt	30 M バイト	-

J2SE プラットフォームの確認

Sun ONE Studio IDE をインストールするには、次のどちらかの条件が満たされている必要があります。

- J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 以上がローカルにインストールされている
- J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 以上がインストールされているパスにネットワークからアクセスできる

注 – 最高の実行時性能を得るには、ローカルシステムに J2SE プラットフォームをインストールして、そのローカルシステムからアクセスします。

推奨されるバージョンの J2SE プラットフォームは、製品の Companion CD-ROM に含まれています。または、<http://java.sun.com/j2se/downloads.html> から入手できます。

このサイトでは、J2SE プラットフォームの現行バージョンとアーカイブバージョンを利用できます。サンでは、J2SE プラットフォームと関連製品について、製品の提供が終了し、標準サポート契約の範囲ではない古いバージョンのダウンロードサイトを維持しています。これらは、開発者が問題を解決する際に役立つように配慮して提供されているものです。「Download Archived Releases」または「Archived Downloads」というリンクを探してください。

▼ 現在の J2SE プラットフォームのバージョンを確認する

- コマンド行に以下のコマンドを入力して、システムで利用できる J2SE プラットフォームのバージョンを確認してください。

```
java -version
```

次のような出力が得られます。

```
java -version
java version "1.4.1_02"
Java(TM) 2 Runtime Environment, Standard Edition (build
1.4.1_02-b02)
Java HotSpot(TM) Client VM (build 1.4.1_02-b02, mixed mode)
```

システムで J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 以上を利用できない場合は、サポートされている J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 をインストールする必要があります。

PATH 環境変数の設定によっては、`java -version` コマンドが完全な結果を返さないこともあります。このコマンドが正しいバージョンを返さない場合に、システムに適切な J2SE バージョンがインストールされていることが分かっているときは、コマンド行オプション `-is:javahome` を使ってパスを指定してください。詳しくは、付録 D を参照してください。

▼ J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 をインストールする

注 – (Solaris の場合のみ) J2SE プラットフォームをインストールする前に、必要なパッチをすべてインストールしてください。詳しくは 19 ページの「Solaris 8 OS パッチの適用」を参照してください。

1. <http://java.sun.com/j2se/downloads.html> または Sun ONE Studio 5 Companion CD からプラットフォームに適切なインストーラファイル入手します。
表 1-6 に、サポートされている各プラットフォームのインストーラファイル名を示します。
2. システムに J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 をインストールします。

インストール手順は Web サイトを参照してください。製品 CD を持っている場合は、Companion CD の J2SE ソフトウェアインストーラファイルと同じディレクトリからインストール手順を入手できます。

表 1-6 J2SE ソフトウェアのインストーラファイル名

プラットフォーム	Companion CD のディレクトリ	インストーラファイル名
Microsoft Windows	j2sdk\windows	j2sdk-1_4_1_02-windows-i586.exe
Linux OS	j2sdk/linux	j2sdk-1_4_1_02-linux-i586-rpm.bin
Solaris OS 32 ビット	j2sdk/solaris_sparc	j2sdk-1_4_1_02-solaris-sparc.tar.Z
Solaris OS 64 ビット	j2sdk/solaris_sparc	j2sdk-1_4_1_02-solaris-sparcv9.tar.Z

以前のソフトウェアリリースのサポート

以前のバージョンの Sun ONE Studio IDE を Sun ONE Studio 5, Standard Edition にアップグレードする場合は、以下のいずれかを行う必要があります。

- 以前のバージョンの IDE を保持するには、インストール時の指示に従って Sun ONE Studio 5 ソフトウェアのインストール先に別のディレクトリを指定します。
以前のバージョンの IDE と同じディレクトリを使用するには、Sun ONE Studio 5 ソフトウェアをインストールする前に、以前のバージョンをアンインストールします。現在インストールされている IDE のバージョンについては、『インストールガイド』を参照してください。
- 現在の IDE ユーザー設定を保持するには、「設定インポートウィザード」で IDE を初期設定するときの指示に従って現在のユーザーディレクトリの場所を指定してください。詳しくは28 ページの「IDE の設定」を参照してください。

適切なユーザー特権

Solaris または Linux システムの場合、このソフトウェアの標準インストールを実行するにはスーパーユーザー特権を持っていることが必要です。標準インストールには、Sun ONE Studio、Sun ONE Application Server 7、PointBase が含まれます。

Linux システムの場合で、PointBase を含む Sun ONE Application Server 7 がすでにインストールされている場合は、IDE だけをインストールするため、スーパーユーザー特権は必要ありません。

Microsoft Windows システムの場合、このソフトウェアの標準インストールを実行するには管理特権が必要です。標準インストールには、Sun ONE Studio、Sun ONE Application Server 7、PointBase が含まれます。PointBase を含む Sun ONE Application Server 7 がすでにインストールされている場合は、IDE だけをインストールするため、管理者特権は必要ありません。

適切なユーザー特権を持っていない場合、またはこれらの特権を必要とするソフトウェアのインストールに不慣れな場合は、システム管理者にサポートを依頼してください。

第2章

IDE のインストール (Microsoft Windows システム)

この章では、製品 CD または Web サイトのダウンロードページを用いて IDE をインストールする方法を説明します。

IDE インストーラは Sun ONE Application Server 7, Standard Edition をデフォルトのアプリケーションサーバーとしてインストールします。アプリケーションサーバーの標準インストールには、PointBase Server 4.2 Restricted Edition(PointBase) が含まれています。すでにシステムに Sun ONE Application Server 7 がインストールされている場合はインストールされません。

IDE のインストールには、以下の 2 種類があります。

- 12 ページの「IDE をインストールする」を参照。
- 14 ページの「インストール時のコマンド行オプションの使用」を参照。

GUI インストーラの使用

IDE のインストールは、製品 CD-ROM を用いて、または <http://sun.co.jp/software/sundev/jde/buy/index.html> から `s1s5se-win-m1.exe` インストーラ起動ツールをダウンロードして実行できます。

注 - インストール中にエラーが発生した場合は、第 12 章を参照してください。

▼ IDE をインストールする

1. J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 以上がシステムにインストールされていることと、必要な空き領域があることを確認します。
詳しくは、第 1 章を参照してください。
2. インストールを開始します。
 - Web からダウンロードしてインストールを開始する場合は、以下の手順に従います。
 - a. administrator (管理者) 特権を使ってシステムにログオンします。
 - b. <http://sun.co.jp/software/sundev/jde/buy/index.html> から `s1s5se-win-ml.exe` インストーラファイルをダウンロードして、`s1studio-download-directory` に保存します。
 - c. `s1studio-download-directory` にある `s1s5se-win-ml.exe` ファイルをダブルクリックします。
開始画面が表示されます。
 - d. 手順 3 に進みます。
 - CD-ROM からインストールを開始する場合は、以下の手順に従います。
 - a. 管理者特権を使ってシステムにログオンします。
 - b. 製品 CD を挿入します。
インストーラが起動して、開始ページが表示されます。手順 3 に進んでください。
インストーラが起動しない場合は、自動実行 (autorun) 機能が無効になっている可能性があります。この場合は、以下の手順に従ってインストーラを開始してください。
 - i. 「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」を選択し、CD-ROM ディレクトリを参照します。
 - ii. ディレクトリ `installers_se` をダブルクリックして `s1s5se-win-ml.exe` を選択し、「開く」をクリックします。
 - iii. 「ファイル名を指定して実行」ダイアログの「OK」をクリックします。
インストーラが起動して、開始ページが表示されます。手順 3 に進んでください。
3. 開始ページで「次へ」をクリックして、インストーラの指示に従います。
インストーラは一連の質問を行い、製品をインストールして、最後に概要ページを表示します。
ライセンスシリアル番号を入力するように指示されたら、以下のいずれかを行ってください。

- 「60 日間試用」 ボタンを使って、60 日間有効の試用ライセンスシリアル番号を生成します。
- 購入した製品パッケージに同梱のカードに記載されているライセンスシリアル番号を使用します。製品をオンラインで購入した場合は、シリアル番号は購入してダウンロードした際に提供されます。

4. 概要ページを確認します。

Sun ONE Application Server の以下のプロパティが表示されます。

- 管理サーバーホスト : localhost
- 管理サーバーポート : 4848
- 管理ユーザー名 : admin
- 管理ユーザーパスワード : adminadmin

5. 管理ユーザーパスワードをメモして保管します。

このパスワードは、Sun ONE Application Server 管理ツールを使用するときに必要になります。ほかのプロパティは、IDE 内の Sun ONE Application Server プロパティシートで表示できます。

6. 「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

デフォルトのインストールディレクトリは `%Drive%\Sun\studio5_se` です。

7. `s1studio-install-directory\install.log` のログファイルを確認します。

以下のメッセージが表示されている場合があります。

WARNING - Installation of the SNMP subagent failed

この警告は、Microsoft Windows SNMP サービスがシステムにインストールされていない場合に表示されます。これは IDE の機能には影響を与えません。SNMP サービスをインストールしている場合は、この警告は表示されません。

8. 第 5 章 に進んで IDE の設定を行います。

注 – Sun ONE Application Server 7 を使用する場合は、アプリケーションを配備する前に第 6 章を読んでください。

インストール時のコマンド行オプションの使用

IDE インストーラは、サイレントモードでインストールするためのコマンド行オプションをサポートしています。この手順は、**CD-ROM** のファイルを使ってインストールするか、**Web** サイトからダウンロードしたファイルを使ってインストールするかによって異なります。一部のコマンド行オプションは、**GUI** インストーラで使用できます。

コマンド行オプションの使い方とサイレントモードでのインストール方法の詳細は、付録 **D** を参照してください。

第3章

IDE のインストール (Linux システム)

この章では、製品 CD または Web サイトのダウンロードページを用いて IDE をインストールする方法を説明します。

IDE インストーラは Sun ONE Application Server 7, Standard Edition をデフォルトのアプリケーションサーバーとしてインストールします。アプリケーションサーバーの標準インストールには、PointBase Server 4.2 Restricted Edition が含まれていません。

Sun ONE Studio 5 IDE のインストールには、以下の 2 種類があります。

- 15 ページの「GUI インストーラの使用」を参照。
- 18 ページの「インストール時のコマンド行オプションの使用」を参照。

GUI インストーラの使用

Sun ONE Studio IDE のインストールは、製品 CD-ROM を用いて、または <http://sun.co.jp/software/sundev/jde/buy/index.html> から `s1s5se-linux-m1.bin` インストーラ起動ツールをダウンロードして実行できます。

注 - インストール中にエラーが発生した場合は、第 12 章を参照してください。

▼ IDE をインストールする

1. J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 以上がシステムにインストールされていることと、必要な空き領域があることを確認します。
詳しくは、第 1 章を参照してください。

2. インストールを開始します。

- Web からダウンロードしてインストールを開始する場合は、以下の手順に従います。

- a. `http://sun.co.jp/software/sundev/jde/buy/index.html` から `s1s5se-linux-ml.bin` インストーラファイルをダウンロードして、`s1studio-download-directory` に保存します。

- b. `s1s5se-linux-ml.bin` ファイルに実行アクセス権を設定します。

```
% chmod a+x /s1studio-download-dir/s1s5se-linux-ml.bin
```

- c. ローカルシステムに表示が行われるように `DISPLAY` 環境変数を設定します。
たとえば、`bash` シェルを使用している場合は、以下のように入力します。

```
# export DISPLAY=your-local-machine:0.0
```

- d. スーパーユーザーになります。

```
%su root
```

プロンプトが表示されたらスーパーユーザーのパスワードを入力します。

- e. インストーラを起動します。

```
# /studio-download-dir/s1s5se-linux-ml.bin
```

開始ページが表示されます。手順 3 に進んでください。

- CD-ROM からインストールを開始する場合は、以下の手順に従います。

- a. スーパーユーザーのパスワードを使ってスーパーユーザーとしてシステムにログインします。

CD-ROM を使用して適切に作業を行うための自動実行 (autorun) 機能を有効にするために、スーパーユーザーとしてマシンにログインします。端末ウィンドウで su コマンドを使用しないでください。このコマンドを使用すると、autorun 機能がインストール処理を開始したときに適切にインストールできなくなります。

- b. 製品 CD を挿入します。

「Do you wish to run /mnt/cdrom/autorun?」と表示されたら「Yes」を選択します。開始ページが表示されます。手順 3 に進んでください。

- インストーラが起動しない場合は、自動実行 (autorun) 機能が無効になっている可能性があります。この場合は、以下の手順に従ってください。

- i. 端末ウィンドウを開きます。

- ii. CD-ROM ディレクトリに変更してインストールを開始します。

```
# cd <cdrom-path>
# ./install.sh
```

開始ページが表示されます。手順 3 に進んでください。

3. 開始ページで「次へ」をクリックして、インストーラウィザードページの指示に従います。

インストーラは一連の質問を行い、製品をインストールして、概要ページを表示します。

ライセンスシリアル番号を入力するように指示されたら、以下のいずれかを行ってください。

- 「60 日間試用」ボタンを使って、60 日間有効の試用ライセンスシリアル番号を生成します。
- 購入した製品パッケージに同梱のカードに記載されているライセンスシリアル番号を使用します。製品をオンラインで購入した場合は、シリアル番号は購入してダウンロードした際に提供されています。

4. 概要ページを確認します。

Sun ONE Application Server が使用する以下のプロパティが表示されます。

- 管理サーバーホスト : localhost
- 管理サーバーポート : 4848
- 管理ユーザー名 : admin
- 管理ユーザーパスワード : adminadmin

5. 管理ユーザーパスワードをメモして保管します。

このパスワードは、Sun ONE Application Server 管理ツールを使用するときに必要になります。ほかのプロパティは、IDE 内の Sun ONE Application Server プロパティシートで表示できます。

6. 「終了」をクリックして、インストールウィザードを終了します。

スーパーユーザーとしてインストールした場合、デフォルトのインストールディレクトリは /opt/studio5_se になります。IDE のみを標準ユーザーとしてインストールした場合は、デフォルトのインストールディレクトリは \$HOME/studio5_se になります。この場合、\$HOME はユーザーのホームディレクトリです。

7. スーパーユーザー特権から抜けます。

8. 第 5 章 に進んで Sun ONE Studio 5 IDE を設定します。

注 – Sun ONE Application Server 7 を使用してアプリケーションを配備する場合は、第 6 章を読んでください。

インストール時のコマンド行オプションの使用

IDE インストーラは、サイレントモードでインストールするためのコマンド行オプションをサポートしています。この手順は、CD-ROM のファイルを使ってインストールするか、Web サイトからダウンロードしたファイルを使ってインストールするかによって異なります。一部のコマンド行オプションは、GUI インストーラで使用できます。

コマンド行オプションの使い方とサイレントモードでのインストール方法の詳細は、付録 D を参照してください。

第4章

IDE のインストール(Solaris OS)

この章では、製品 CD または Web サイトのダウンロードページを用いて、サポートされている Solaris オペレーティングシステムに Sun ONE Studio 5 IDE をインストールする方法を説明します。また、`solaris_patch_installer` スクリプトを使って必要な Solaris 8 OS パッチを適用する方法も説明します。

IDE インストーラは Sun™ ONE Application Server 7, Standard Edition をデフォルトのアプリケーションサーバーとしてインストールします。アプリケーションサーバーの標準インストールには、PointBase Server 4.2 Restricted Edition が含まれています。すでにシステムに Sun ONE Application Server 7 がインストールされている場合は、2 番目のコピーは自動的にインストールされません。

IDE のインストールには、以下の 2 種類があります。

- 22 ページの「GUI インストーラの使用」を参照。
- 25 ページの「インストール時のコマンド行オプションの使用」を参照。

IDE をインストールする前に、必要な Solaris 8 OS パッチをインストールする必要があります。

Solaris 8 OS パッチの適用

`solaris_patch_installer` スクリプトを実行して、システムに、IDE が必要とする Solaris パッチをすべてインストールします。このパッチインストーラには、Solaris 8 オペレーティングシステムに必要な Solaris パッチのパッケージが含まれています。

`solaris_patch_installer` スクリプトは、Sun ONE Studio 5 Companion CD に含まれており、また、Sun ONE Studio 5 製品のダウンロードページからも入手できます。`solaris_patch_installer` スクリプトの使用方法については、20 ページの「Solaris 8 OS のパッチをインストールする」を参照してください。

必要な Solaris パッチをインストールしていない状態で IDE インストーラを起動すると、必要な Solaris パッチに関するメッセージが表示されます。これらのパッチを個々にインストールするのは推奨されません。提供されている `solaris_patch_installer` スクリプトを使用してください。Solaris 環境への Solaris パッチのインストールについて不明な点がある場合は、システム管理者に連絡してください。Solaris OS のパッチをインストールするには、スーパーユーザー特権が必要です。

注 — 一部の Solaris パッチでは、インストールの完了後にシステムの再起動が必要になります。その場合、インストーラは再起動を促します。

▼ Solaris 8 OS のパッチをインストールする

1. <http://sun.co.jp/software/sundev/jde/try/index.html> から `solaris-patches-directory` ディレクトリに `solaris_patch_installer.tar.gz` ファイルをダウンロードします。Sun ONE Studio 5 Companion CD に含まれている同名のファイルを使用することもできます。

注 — システムの `solaris-patches-directory` に、ダウンロードしたファイルを圧縮解除して含まれているファイルを抽出するだけの十分な空き領域があることを確認してください。ディスク上に最低 160 M バイトの空き領域が必要です。

2. 次のように入力して、`solaris-patches-directory` ディレクトリに移動し、ダウンロードしたファイルを圧縮解除して、含まれているファイルを抽出します。

```
% cd solaris-patches-directory
% /usr/bin/gzcat solaris_patch_installer.tar.gz | tar xvf -
```

`solaris_patch_installer` ファイルと `patches` ディレクトリが、`solaris-patches-directory` ディレクトリに抽出されます。

3. (省略可能) ディスク領域を回復するには、次のように入力してダウンロードしたファイルを削除します。

```
% rm -rf solaris_patch_installer.tar.gz
```

4. スーパーユーザーになります。

```
% su root
```

プロンプトが表示されたらスーパーユーザーのパスワードを入力します。

5. *solaris-patches-directory* に移動して、*solaris_patch_installer* スクリプトを実行します。

```
# cd solaris-patches-directory  
# ./solaris_patch_installer
```

solaris_patch_installer によって必要なパッチがインストールされます。

以下のような出力が表示されます。

```
# ./solaris_patch_installer  
J2SE v.1.4.1 の Solaris パッチインストールプログラム  
インストール中 110380-04...すでに適用されています  
  
インストール中 110934-10...インストールに成功しました  
  
インストール中 112396-02...インストールに成功しました  
  
インストール中 108987-13...インストールされていないパッケージにパッチを適用  
しようとしています  
  
インストール中 111310-01...すでに適用されています
```

これは通常表示されるメッセージのサンプルで、パッチインストーラスクリプトが正しく動作していることを示しています。

6. 指示された場合は、システムを再起動します。

```
システムにインストールされたパッチを有効にするために、システムを再起動する  
必要があります。  
システムをすぐに再起動しますか？ (y/n)  
# y
```

7. 再起動を促すメッセージが表示されなかった場合は、以下を入力してスーパーユーザー特権から抜けます。

8. (省略可能) ディスク領域を回復するには、*solaris-patches-directory* を削除します。

```
% rm -rf solaris-patches-directory
```

このマニュアルの付録 A に、*solaris_patch_installer* スクリプトに含まれている全 Solaris パッチの一覧があります。

solaris_patch_installer によって、J2SE プラットフォームと Sun ONE Studio IDE およびそのコンポーネントに必要な全パッチがインストールされます。J2SE プラットフォームをインストールする前に、必ずパッチインストーラスクリプトを実行してください。

GUI インストーラの使用

Sun ONE Studio IDE のインストールは、製品 CD を用いて、または <http://sun.co.jp/software/sundev/jde/buy/index.html> から *s1s5se-sol-sparc-ml.bin* インストーラ起動ツールをダウンロードして実行できます。

注 – インストール中にエラーが発生した場合は、第 12 章を参照してください。

▼ IDE をインストールする

1. Sun ONE Studio 5 ソフトウェアをインストールする前に、J2SE プラットフォームのバージョン 1.4.1_02 以上がシステムにインストールされていることを確認します。
詳しくは 6 ページの「J2SE プラットフォームの確認」を参照してください。
2. インストールを開始します。
 - Web からダウンロードしてインストールを開始する場合は、以下の手順に従います。
 - a. <http://sun.co.jp/software/sundev/jde/buy/index.html> から *s1s5se-sol-sparc-ml.bin* インストーラファイルをダウンロードして、*s1studio-download-directory* に保存します。

b. `s1s5se-sol-sparc-ml.bin` ファイルに実行アクセス権を設定します。

```
% chmod a+x /s1studio-download-dir/s1s5se-sol-sparc-ml.bin
```

c. ローカルシステムに表示が行われるように `DISPLAY` 環境変数を設定します。

```
% setenv DISPLAY your-local-machine:0.0
```

d. X サーバーへのアクセスを有効にします。

```
% xhost + your-local-machine
```

e. スーパーユーザーになります。

```
%su root
```

プロンプトが表示されたらスーパーユーザーのパスワードを入力します。

f. インストーラを起動します。

```
# /studio-download-dir/s1s5se-sol-sparc-ml.bin
```

開始ページが表示されます。手順 3 に進んでください。

■ CD-ROM からインストールを開始する場合は、以下の手順に従います。

a. スーパーユーザーのパスワードを使ってスーパーユーザーとしてシステムにログインします。

CD-ROM を使用して適切に作業を行うための `autorun` 機能を有効にするために、スーパーユーザーとしてマシンにログインします。端末ウィンドウで `su` コマンドを使用しないでください。このコマンドを使用すると、`autorun` 機能がインストール処理を開始したときに適切にインストールできなくなります。

b. 製品 CD を挿入します。

■ Solaris 8 システムの場合は、インストーラが開始して、開始ページが表示されます。手順 3 に進んでください。

■ Solaris 9 システムの場合は、CD-ROM を挿入すると「ファイルマネージャ」ウィンドウが開きます。インストーラを起動するには、「ファイルマネージャ」ウィンドウの `volstart` アイコンか `install.sh` アイコンをダブルクリックします。

インストーラが起動しない場合または「ファイルマネージャ」ウィンドウが表示されない場合は、以下の手順に従ってください。

- i. 端末ウィンドウを開きます。
- ii. CD-ROM ディレクトリに変更してインストールを開始します。

```
# cd <cdrom-path>
# ./install.sh
```

開始ページが表示されます。手順 3 に進んでください。

3. 開始ページで「次へ」をクリックして、インストーラウィザードページの指示に従います。

インストーラは一連の質問を行い、製品をインストールして、概要ページを表示します。

ライセンスシリアル番号を入力するように指示されたら、以下のいずれかを行ってください。

- 「60 日間試用」 ボタンを使って、60 日間有効の試用ライセンスシリアル番号を生成します。
- 購入した製品パッケージに同梱のカードに記載されているライセンスシリアル番号を使用します。製品をオンラインで購入した場合は、シリアル番号は購入してダウンロードした際に提供されています。

注 – デフォルト以外のインストールディレクトリを指定する場合、NFS マウントしたディレクトリは指定しないでください。Sun ONE Application Server 7 は、NFS マウントしたディレクトリにはインストールできません。

4. 概要ページを確認します。

Sun ONE Application Server が使用する以下のプロパティが表示されます。

- 管理サーバーホスト: localhost
- 管理サーバーポート: 4848
- 管理ユーザー名: admin
- 管理ユーザーパスワード: adminadmin

5. 管理ユーザーパスワードをメモして保管します。

このパスワードは、Sun ONE Application Server 管理ツールを使用するときになります。ほかのプロパティは、IDE 内の Sun ONE Application Server プロパティシートで表示できます。

6. 「終了」をクリックして、インストールウィザードを終了します。

Solaris システムのデフォルトのインストールディレクトリは、/opt/studio5_se です。

7. クライアントアクセスを有効にした場合は、これを無効にします。

```
# xhost - your-machine-name
```

8. スーパーユーザー特権から抜けます。
9. 第 5 章 に進んで Sun ONE Studio 5 IDE を設定します。

注 – Sun ONE Application Server 7 を使用する場合は、アプリケーションを配備する前に第 6 章を読んでください。

インストール時のコマンド行オプションの使用

IDE インストーラは、サイレントモードでインストールするためのコマンド行オプションをサポートしています。この使用手順は、CD-ROM のファイルを使ってインストールするか、Web サイトからダウンロードしたファイルを使ってインストールするかによって異なります。一部のコマンド行オプションは、GUI インストーラで使用できます。

コマンド行オプションの使い方とサイレントモードでのインストール方法の詳細は、付録 D を参照してください。

第5章

IDE の設定

IDE をインストールしたら、この章の説明に従ってその起動、設定、登録を行います。

この章は、以下の節で構成されています。

- 27 ページの「IDE の起動」
- 28 ページの「IDE の設定」
- 30 ページの「起動オプションの使用」

IDE の起動

IDE を初めて起動すると、次の作業を行うように促されます。

- 以前のバージョンでカスタマイズされた設定のインポート
- ソフトウェアの登録
- 自動的にアップデートチェックを行うかどうかの指定

▼ IDE を起動する (Microsoft Windows システム)

以下のいずれかの方法を使用します。

- デスクトップ上の Sun ONE Studio SE アイコンをダブルクリックします。
- 「スタート」 → 「プログラム」 → 「Sun Microsystems」 → 「Sun ONE Studio SE」 → 「Sun ONE Studio SE」の順に選択します。
- コマンド行に以下のコマンドを入力して IDE を起動します。

```
C:\> runidew.exe
```

IDE を起動して Windows コンソールにメッセージを表示するには、以下を入力します。

```
C:\> runide.exe
```

Windows コンソールに、IDE を使って生成されたエラーメッセージなどのコンソールメッセージが表示されます。

runidew.exe を使用すると、単に IDE が起動します。これはデスクトップアイコンによって使用されるデフォルトの起動ツールです。

runide.exe コマンドオプションは、コマンド行または `s1studio-install-directory\bin\ide.cfg` ファイルに指定できます。詳しくは30 ページの「起動オプションの使用」を参照してください。

▼ IDE を起動する (Solaris または Linux システム)

1. `s1studio-install-directory/bin` ディレクトリに移動します。

デフォルトのインストールディレクトリは、`/opt/studio5_se` です。

```
% cd /opt/studio5_se/bin
```

2. IDE を起動します。

```
% runide.sh
```

runide.sh コマンドオプションは、コマンド行または `s1studio-install-directory/bin/ide.cfg` ファイルに指定できます。詳しくは30 ページの「起動オプションの使用」を参照してください。

IDE の設定

IDE では、以下のウィザードによって IDE 環境のさまざまな面を制御できます。

- 設定インポートウィザード
- 登録ウィザード
- 設定ウィザード

設定インポートウィザード

「設定インポートウィザード」は、IDE を最初に起動したときに表示されます。このウィザードでは、Sun ONE Studio 5 で使用するために以前のバージョンの IDE から設定をインポートできます。

登録ウィザード

「登録ウィザード」は、IDE を最初に起動したときに表示されます。このウィザードを使用して、Sun ONE Studio Developer Resources Web サイトに登録できます。

Web を使用して Sun ONE Studio 5 ソフトウェアを登録すると、次のようなことができるようになります。

- アップデートセンターを使った、使用環境に適応した新しいモジュールやアップデートのダウンロードおよびインストール
- Early Access プログラム (<http://forte.sun.com/eap>) への加入と IDE の新しい非公開版ビルド、Sun ONE Studio 5 モジュールのプレビューリリース、パッチ、バグ修正コードの入手
- 製品発表の入手

Sun ONE Studio Developer Resources へのユーザー登録は、後で IDE のメインウィンドウの「ヘルプ」→「登録ウィザード」を使用して行うこともできます。

設定ウィザード

「設定ウィザード」には、IDE の開始画面から、または IDE のメインウィンドウの「ツール」→「設定ウィザード」を選択して起動することができます。

「設定ウィザード」では、以下の作業を実行できます。

- IDE 表示ウィンドウモードの設定
- 内部および外部 Web ページに使用する Web ブラウザの指定
- ファイアウォールがある場合に使用する Web プロキシの設定
- 「モジュールのインストール」ページを使用した IDE モジュールの使用可能または使用不可の設定
- 「アップデートセンター」ページを使用した以下の制御
 - 自動アップデートチェック
 - 自動アップデートの頻度
 - チェックするアップデートセンターの URL

▼ IDE モジュールを使用可能または使用不可にする

1. IDE のメインウィンドウから「ツール」→「設定ウィザード」を選択します。
2. 「モジュールのインストール」ページが表示されるまで「次へ」をクリックします。
3. モジュールのカテゴリノードを展開して、モジュールを一覧表示します。
モジュールアイコンをクリックして、モジュール機能の短い説明を表示します。
4. 「使用可能」プロパティ値を「true」または「false」を切り換えて、モジュールを使用可能または使用不可にします。

デフォルトでは、WebLogic サーバー配備モジュール (WebLogic プラグイン) を除き、IDE とともにインストールされたすべてのモジュールが使用可能になっています。WebLogic サーバー配備モジュールを使用可能にする方法については、第 9 章を参照してください。

起動オプションの使用

runide 起動スクリプトは、追加のコマンド行オプションを使って実行できます。

このオプションには次の使用方法があります。

- コマンド行でオプションを入力する
- `s1studio-install-directory/bin/ide.cfg` ファイルでオプションを指定する

IDE は、コマンド行オプションを構文解析する前に `ide.cfg` ファイルを読み取ります。`ide.cfg` ファイルでは、オプションを複数の行に入力できます。

表 5-1 に、runide コマンド行オプションを示します。

表 5-1 IDE 起動オプション

オプション	説明
<code>-h</code> <code>-help</code>	利用可能なオプションとその使用方法の説明を出力します。
<code>-jdkhome <i>jdk-home-dir</i></code>	インストール時に指定されたデフォルト以外の J2SE プラットフォームの場所を指定する
<code>-cp:p <i>additional-classpath</i></code>	IDE のクラスパスの先頭に指定されたクラスパスを付加する
<code>-cp:a <i>additional-classpath</i></code>	IDE のクラスパスに指定されたクラスパスを付加する

表 5-1 IDE 起動オプション (続き)

オプション	説明
-userdir sIstudio-user-directory	デフォルトに優先する <i>sIstudio-user-directory</i> (ユーザー設定の保存場所) を指定する。 このオプションを指定しないと、デフォルトの場所が使用される。詳細は、使用するプラットフォームのインストールに関する章を参照。
-J <i>jvm-flags</i>	指定されたフラグを Java™ 仮想計算機 (JVM™) ソフトウェアに直接渡す
• -Xverify:none	-J -Xverify:none は、起動を高速にするために、バイトコードの妥当性を検査しないよう JVM ソフトウェアに指示する。このフラグを設定すると、Java 言語が提供する保護の一部が機能しなくなる。詳細については、JVM ソフトウェアのマニュアルを参照。
• -Xms24m	-J -Xms24m は、JVM ソフトウェアの初期ヒープサイズを 24 M バイトに設定する。このフラグは、JVM ソフトウェアがヒープサイズを拡張するのを防ぎ、これにより高速な起動を可能にする。
• -Xmx96m	最大 Java ヒープサイズ
• -Xss1024k	スレッドスタックのサイズ
(Microsoft Windows のみ) hotspot または -classic	デフォルトに優先して使用する Java 仮想計算機 (JVM) のタイプを指定する。 JVM は Java virtual machine の略語で、Java プラットフォーム用の仮想マシンを意味する。
"-ui" <i>UI_class_name</i>	IDE の Look & Feel として指定された UI クラスを設定する
"-fontsize" <i>size</i>	IDE のユーザーインターフェイスで使用するフォントサイズ (ポイント数で指定) を設定する。デフォルト値は 11。

第6章

IDE での Sun ONE Application Server の使用

IDE をインストールしたら、Sun ONE Application Server をデフォルトのアプリケーションサーバーとして構成できます。この章では、インストールを検証し、第7章で示されている例を配備するための基本的な構成手順について説明します。この章では、利用可能なすべての構成オプションについては説明しません。詳細は、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』と『Sun ONE Application Server 7 管理者ガイド』を参照してください。Sun ONE Application Server 7, Standard Edition のマニュアルは、<http://docs.sun.com/> から入手できます。

この章は、以下の節で構成されています。

- 33 ページの「管理ドメインの理解」
- 34 ページの「デフォルト管理ドメインの使用」
- 37 ページの「各ユーザーの管理ドメインの作成」
- 42 ページの「Sun ONE Application Server 7 の使用」

管理ドメインの理解

Sun ONE Application Server には、管理ドメインという機能が装備されています。これによって、同じインストールイメージを再使用する完全に別個のアプリケーションサーバー実行時構成を複数定義できます。それぞれの管理ドメインは管理サーバーによって表され、これは1つ以上のアプリケーションサーバーインスタンスを制御します。管理ドメインの構成は、マシン上の任意の場所に格納できます。

自身のワークステーションを使用する開発者が単一の管理ドメインを使用して作業するケースは多くみられますが、複数管理ドメインの使用は共有の開発サーバーと運用環境の双方にとって非常に有益です。共有開発サーバーでは、各開発者の管理ドメインを作成することで共有サーバーマシン上に各開発者用の区画(専用領域)が提供されます。運用環境では、管理ドメインを使用すれば、システム管理者は製品を複数インストールしなくても、セキュリティ保護された別個の実行時構成を定義できます。

開発環境で使用されている技術により、個々の開発者が使用できる管理サーバードメインの作成や構成には何通りかの方法があります。

表 6-1 は、Sun ONE Application Server 7 の構成を行うためにこの章で説明されている作業をまとめています。

表 6-1 Sun ONE Application Server 作業

説明	作業の参照	許可されるユーザー
インストール時に作成・構成されたデフォルトの管理ドメインを起動する。	35 ページの「デフォルト管理サーバーを起動する」を参照	スーパーユーザー または管理者のみ
ほかのユーザーが IDE で使用するための管理ドメインを作成する	38 ページの「ほかのユーザーのドメインを作成する」を参照	スーパーユーザー または管理者のみ
IDE サーバレジストリにユーザードメインを追加する	40 ページの「IDE にユーザーのドメインを追加する」を参照	すべての IDE ユーザー
IDE のサーバレジストリにデフォルトアプリケーションサーバーがあることを確認する	43 ページの「デフォルトアプリケーションサーバーを確認する」を参照	すべての IDE ユーザー
Sun ONE Application Server 7 インスタンスを起動する	43 ページの「アプリケーションサーバーインスタンスを起動する」を参照	すべての IDE ユーザー
デフォルトの管理ドメインとサーバーを操作するためのアクセス権を持つユーザーグループを作成する	『Sun ONE Application Server 7 管理者ガイド』を参照	スーパーユーザー または管理者のみ
標準ユーザーがデフォルトの管理ドメインとサーバーを操作できるように、ドメインディレクトリ上のアクセス権を変更する	『Sun ONE Application Server 7 管理者ガイド』を参照	スーパーユーザー または管理者のみ

デフォルト管理ドメインの使用

Sun ONE Studio と Sun ONE Application Server 7 をインストールすると、事前に構成されたデフォルトの管理ドメインが作成されます。このドメインは、IDE のサーバレジストリに追加されます。サーバーの設計では、この管理ドメインと関連する管理サーバーはスーパーユーザーに属します。

IDE のユーザーがスーパーユーザーまたは管理者特権を持っている場合は、インストールされたデフォルトの設定を使ってサーバーを起動できます。たとえば、管理特権を持つユーザーログインを使って開発者が日々の作業を行っている Microsoft Windows 開発環境では、35 ページの「デフォルト管理サーバーを起動する」で説明されているデフォルトの管理ドメインとサーバーを使用します。

標準 IDE ユーザーがスーパーユーザーまたは管理特権を持っていない場合にデフォルト管理ドメインを使用するには、以下の追加作業 (このマニュアルでは手順は説明されていません) を行います。

- スーパーユーザーが所有するデフォルトドメインを操作するためのアクセス権を持つユーザーグループを作成する。
- 標準ユーザーが自分たちのアプリケーションサーバーインスタンスを作成し、デフォルト管理サーバーを起動したり停止することができるように、ドメインディレクトリのアクセス権を変更する。
- IDE の外部からデフォルト管理サーバーを起動し (これはスーパーユーザーが行う)、このドメインに属するサーバーインスタンスを IDE 内部から IDE ユーザーが操作できるようにする。

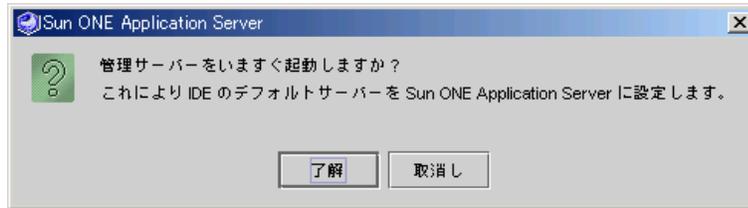
注意 – ドメインディレクトリのアクセス権を変更する場合、適切に処理しないとセキュリティの問題が発生します。詳細は、Sun ONE Application Server 7 のマニュアルを参照してください。

▼ デフォルト管理サーバーを起動する

これは、スーパーユーザーまたは管理特権を持つユーザーが IDE を最初に起動したときに行う作業です。IDE を初めて起動するのではない場合は、43 ページの「デフォルトアプリケーションサーバーを確認する」を参照してください。

1. IDE のメインウィンドウの「エクスプローラ」で、「実行時」タブを選択します。
「エクスプローラ」の「実行時」タブに、「サーバーレジストリ」ノードが表示されます。「サーバーレジストリ」ノードには、インストールされているすべての Web サーバーとアプリケーションサーバーを表すサブノードが含まれています。デフォルトサーバーを示すノードも表示されます。
2. 「サーバーレジストリ」ノードを選択します。

管理サーバーを起動するかどうかを問い合わせる照会ウィンドウが表示されます。この場合の管理サーバーは、デフォルトドメインの管理サーバーを意味します。この管理サーバーは、スーパーユーザーまたは管理者特権を持つユーザーのみが実行できます。



3. 「了解」をクリックします。

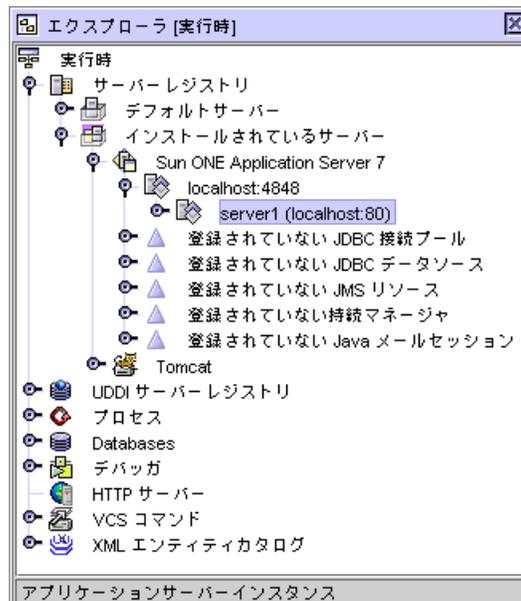
IDE はデフォルト管理サーバーを起動し、Sun ONE Application Server を IDE のデフォルトアプリケーションサーバーとして構成します。この処理には多少の時間がかかります。

4. 「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。
5. Sun ONE Application Server 7 ノードを展開します。



「localhost:4848」ノードは、管理サーバーインスタンスです。

6. 「localhost:4848」ノードを展開して、アプリケーションサーバーインスタンスの「server1」を表示します。



7. アプリケーションサーバーインスタンスを起動するには、「server1」を右クリックして、コンテキストメニューから「状態」を選択します。
「Sun ONE Application Server インスタンスステータス」ダイアログが表示されます。
8. 「サーバーを起動」をクリックします。
アプリケーションサーバーインスタンスが起動します。

各ユーザーの管理ドメインの作成

Solaris および Linux 開発環境のユーザーは、通常スーパーユーザー特権を持つユーザーとして IDE を実行することはありません。バンドル製品の Sun ONE Application Server を使用する場合は、IDE ユーザーに、それらユーザーが起動および停止可能な管理ドメインへのアクセス権を付与する必要があります。これによってユーザーは、開発作業で必要になった際はそのドメイン内でアプリケーションサーバーインスタンスを作成したり操作したりすることが可能になります。34 ページの「デフォルト管理ドメインの使用」で説明されているように、これはデフォルト管理サーバードメインを使って何通りかの方法で行うことができます。ここで説明する手順では、それぞれの IDE ユーザーに別個のドメインを作成します。これを行うと、各ユーザーは非常に柔軟に管理ドメインの使用を制御することが可能になり、システム管理者の介入は最小限に抑えられます。

この手順では、スーパーユーザーが各標準ユーザーのために別個の Sun ONE Application Server 管理ドメインを作成します。標準ユーザーは、IDE のサーバーレジストリに管理ドメインを追加することで、IDE 内で構成を完了します (Sun ONE Application Server 7 のマニュアルでは、これは「登録」とも呼ばれます)。これによって標準ユーザーは、開発作業の必要に応じてこのドメインの管理サーバーを制御し、アプリケーションサーバーのインスタンスを操作することが可能になります。

この節の作業では、コマンド行インタフェースの Sun ONE Application Server `asadmin` ユーティリティを使用します。`asadmin` ユーティリティの詳細は、<http://docs.sun.com/doc/817-0601> で『Sun ONE Application Server 7 管理者ガイド』を参照してください。

▼ ほかのユーザーのドメインを作成する

ほかのユーザーのドメインを作成するためのこの作業は、スーパーユーザーが実行します。

1. スーパーユーザーになります。
2. `asadmin` ユーティリティの実行可能ファイルがあるディレクトリに移動します。
たとえば、以下のように入力します。

```
# cd /opt/studio5_se/appserver7/bin
```

この例では、Solaris のデフォルトインストールディレクトリが示されています。この製品をインストールしたときに別のインストールディレクトリを指定した場合は、`/opt/studio5_se` をそのディレクトリへのパス名に置き換えてください。

3. `asadmin` ユーティリティで、`create-domain` コマンドを使ってドメインを作成します。

```
# ./asadmin create-domain --sysuser standarduser --adminport
portnumber --adminuser useradmin --adminpassword userpassword userdomain
```

このコマンドのオプションと関連する引数を以下の表に示します。ドメイン名は関連するオプションなしで指定します。

オプション	引数	説明
<code>--sysuser</code>	<code>standarduser</code>	<code>standarduser</code> はシステムに対する既存標準ユーザーのログイン ID
<code>--adminport</code>	<code>portnumber</code>	<code>portnumber</code> はこの管理ドメインインスタンスで使用できるポート番号
<code>--adminuser</code>	<code>useradmin</code>	<code>useradmin</code> はこの管理ドメインに関連するユーザー名
<code>--adminpassword</code>	<code>userpassword</code>	<code>adminpassword</code> は、この管理ドメインに対する、ユーザー名に関連するユーザーパスワード
-	<code>userdomain</code>	<code>userdomain</code> は標準ユーザーのドメイン名で、一意であることが必要
<code>--path</code>	<code>domain_path</code>	ドメインを作成するディレクトリへのパス。指定しないと、ドメインはデフォルトのドメインディレクトリに作成される 詳細は、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』を参照

以下のメッセージが表示されます。

```
Created Domain userdomain successfully.
```

4. スーパーユーザー特権から抜けます。
5. 手順 3 で使用したポート番号、管理ユーザー名、管理ユーザーパスワード、およびドメイン名を標準ユーザーに提供します。

標準ユーザーはこれらを使って IDE 内からアプリケーションサーバーの構成を完了します。これらの値は40 ページの「IDE にユーザーのドメインを追加する」の手順 5 で使用されます。

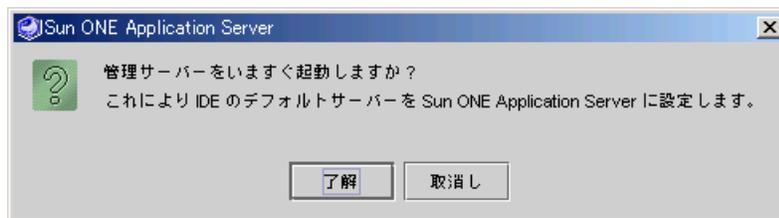
▼ IDE にユーザーのドメインを追加する

この作業は標準ユーザーが行います。

注 – この作業は、通常の日々の開発作業で IDE を実行するときと同じログインとアクセス権を使って行います。

1. IDE を起動します。
2. IDE の「エクスプローラ」で「実行時」タブを選択します。
3. 「サーバーレジストリ」ノードを選択します。

照会ウィンドウに「管理サーバーをいまずぐ起動しますか？」というメッセージが表示されます。これは、スーパーユーザーまたは管理者のみが実行できるデフォルトドメインの domain1 を意味します。

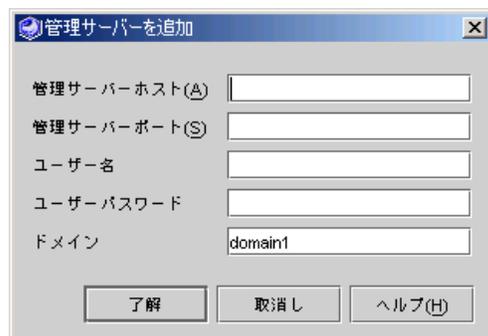


「了解」をクリックすると、標準ユーザーは使用できない管理サーバーが作成されて起動します。

4. 「取消し」をクリックします。

照会ウィンドウが消去され、ユーザー管理サーバーを追加することが可能になります。これは、38 ページの「ほかのユーザーのドメインを作成する」で説明されているように、システム管理者やほかのスーパーユーザーが作成しています。
5. 以下の手順に従って、管理サーバーを追加します (アプリケーションサーバーのマニュアルでは「登録する」とも言います)。
 - a. 「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。
 - b. Sun ONE Application Server 7 ノードを右クリックして、コンテキストメニューから「管理サーバーを追加」を選択します。

「管理サーバーを追加」ダイアログが表示されます。



c. テキストフィールドに値を入力します。

IDE をインストールしてユーザー管理ドメインを作成したスーパーユーザーか管理者に以下の値を問い合わせてください。

管理サーバーホスト	ローカルホストまたはローカルマシン名
管理サーバーポート	create-domain コマンドで使用された <i>portnumber</i>
ユーザー名	create-domain コマンドで使用されたユーザー名の <i>useradmin</i>
ユーザーパスワード	create-domain コマンドで使用されたユーザーパスワードの <i>userpassword</i>
ドメイン	create-domain コマンドで使用された <i>userdomain</i>

d. 「了解」をクリックします。

以下のエラーメッセージが表示される場合があります。

管理サーバーに接続できません。管理サーバーがローカルの場合、サーバーを起動します。

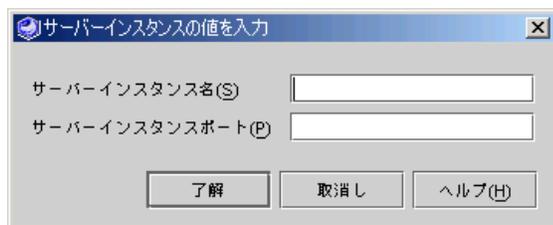
e. 「了解」をクリックしてエラーメッセージを取り消します。

ローカル管理サーバーが起動し、新しい管理サーバーが IDE に追加されます。ドメインと管理サーバーを表す新しい管理サーバーノードが「エクスプローラ」に生成されます。この時点でアプリケーションサーバーインスタンスを作成できます。

6. アプリケーションサーバーインスタンスを作成するには、以下の手順に従います。

a. 「エクスプローラ」で、入力したポート番号で識別される新しい管理サーバーノードを右クリックし、コンテキストメニューから「サーバーインスタンスを作成」を選択します。

「サーバーインスタンスの値を入力」ダイアログが表示されます。



b. 名前と使用できるポート番号を入力します。

たとえば、「MyServer」および「4855」と入力します。

注 – UNIX システムでは、ポート番号 1023 以下は予約済みです。この場合は、1023 より大きな使用可能なポート番号を使用してください。デフォルトアプリケーションサーバーや、システムのほかのアプリケーションで使用されているポート番号は使用しないでください。

c. 「了解」をクリックします。

IDE に新しいアプリケーションサーバーインスタンスが作成されます。これは、管理サーバーインスタンスを展開して表示できます。

7. 新しいサーバーをデフォルトアプリケーションサーバーおよび Web サーバーとして設定するには、新しいアプリケーションサーバーインスタンスを右クリックして「デフォルトとして設定」を選択します。
8. 「デフォルトサーバー」ノードを展開して確認します。

J2EE アプリケーションと Web 層アプリケーションのデフォルトサーバーに、新しいサーバーがデフォルトとして表示されます。

Sun ONE Application Server 7 の使用

管理サーバーが動作中であれば、アプリケーションサーバーインスタンスを使ってアプリケーションの起動、停止、配備を実行できます。管理サーバーが動作を停止すると、IDE はアプリケーションサーバーへの接続を失います。システムの再起動など何らかの理由で管理サーバーが停止した場合は、そのドメインの管理サーバーを起動してデフォルトアプリケーションサーバーを再度設定する必要があります。

この章では、IDE からの Sun ONE Application Server 7 の使用について説明します。アプリケーションサーバーのマニュアルでは、アプリケーションサーバーを起動および停止するためのほかの機能、ならびに `asadmin` コマンド行インタフェース、管理コンソール、Windows サービスなどの使い方が説明されています。詳細については、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』を参照してください。

注 – 管理コンソールを使用するには、インストール時に管理ユーザーパスワードを割り当てられていることが必要です。デフォルトのパスワードは、adminadmin ですが、インストール後に変更されている可能性があります。これについては、システム管理者に確認してください。

▼ デフォルトアプリケーションサーバーを確認する

以前に Sun ONE Application Server を起動した場合は、以下の手順に従ってこれがまだデフォルトサーバーであることを確認できます。

1. IDE の「エクスプローラ」で「実行時」タブを選択します。
2. 「サーバーレジストリ」ノードを展開し、その「デフォルトサーバー」サブノードを展開します。
「J2EE アプリケーション」ノードに `server-instance(server-hostname:server-portnumber)` と示されている場合は、Sun ONE Application Server はデフォルトアプリケーションサーバーです。そうでない場合は、次の手順に進んでください。



3. 「インストールされているサーバー」ノードの下でサーバーインスタンスを探して右クリックし、「デフォルトとして設定」を選択します。
サーバーが J2EE アプリケーションと Web 層アプリケーションのデフォルトサーバーとして設定されます。

▼ アプリケーションサーバーインスタンスを起動する

1. アプリケーションサーバーノードを右クリックし、コンテキストメニューから「状態」を選択します。

注 – このノードが表示されない場合は、該当する管理サーバーが動作していない可能性があります。この場合は管理サーバーが動作していることを確認して、再度同じ手順を行ってください。

「Sun ONE Application Server インスタンスステータス」ダイアログが表示されます。



2. 「サーバーを起動」をクリックします。

ダイアログに「サーバーを停止」ボタンが表示された場合は、サーバーはすでに動作しています。

「ステータス」行に「実行中」と表示されると、サーバーが起動したことが分かります。

3. 「閉じる」をクリックします。

第7章

IDE のインストールの検証

この章では、Sun ONE Application Server 7 を使って簡単な Web アプリケーションを作成することによって、Sun ONE Studio IDE のインストールを検証する方法を説明します。この章は、以下の節で構成されています。

- 45 ページの「J2EE プラットフォームアプリケーションの作成」

注 – 以下の説明では、IDE と Sun ONE Application Server 7 をインストールして、デフォルトアプリケーションサーバーを構成済みであることを前提としています。アプリケーションサーバーの構成方法については、第 6 章を参照してください。

J2EE プラットフォームアプリケーションの作成

以下の手順では、Sun ONE Application Server 7 を使って Java 2 Platform, Enterprise Edition Specification (J2EE プラットフォーム) の簡単なテストアプリケーションを作成する方法を示します。

1. helloApp というディレクトリを作成します。
2. IDE を起動して、Sun ONE Application Server 7 がデフォルトアプリケーションサーバーであることを確認します。
詳細は、第 6 章を参照してください。
3. メインウィンドウから「ファイル」→「ファイルシステムをマウント」を選択することによって、IDE に helloApp ディレクトリをマウントします。
新規ウィザードが表示されます。
 - a. 「ローカルディレクトリ」を選択して「次へ」をクリックします。

c. 1 行追加して、helloTestBean メソッドを以下のようにします。

```
public java.lang.String sayHello() {  
    return "Hello there, Studio!";  
}
```

10. IDE のメインウィンドウから「構築」→「コンパイル」を選択するか、F9 キーを押して sayHello メソッドをコンパイルします。
正常にコンパイルされると、出力ウィンドウ (コンパイラ) に「完了 helloTestBean」というメッセージが表示されます。
11. 「エクスプローラ」ウィンドウの「ファイルシステム」タブで、以下の手順に従って新しい EJB テストアプリケーションを作成します。
 - a. 「helloTest(EJB)」ノードを右クリックして、「新規 EJB テストアプリケーションを作成」を選択します。
「新規 EJB テストアプリケーションを作成」ダイアログが表示されます。
 - b. すべてのデフォルト値をそのまま受け入れて、「了解」をクリックします。
helloTest_EJBModule という EJB モジュールと helloTest_WebModule という Web モジュール、helloTest_TestApp というアプリケーションが作成されて、自動的に IDE にマウントされます。
12. 「エクスプローラ」ウィンドウの「ファイルシステム」タブで「helloTest_TestApp」ノードを右クリックして、「実行」を選択します。
進捗モニターが表示され、IDE が「実行」タブに切り替わります。
helloTest_TestApp が配備され、
`http://localhost:8000/helloTest_TestApp/dispatch.jsp` という URL で Web ブラウザが表示されます。
ブラウザが自動的に表示されない場合は、手動でブラウザを開き、URL として `http://localhost:8000/helloTest_TestApp` と入力してください。

注 – Web ブラウザが、localhost から始まるドメインにプロキシサーバーを使わない設定になっていることを確認してください。

`http://admin-server-host:admin-server-portnumber/helloTest_TestApp/dispatch.jsp` ページが表示された場合、アプリケーションサーバーは正しく機能していることとなります。

これで、インストールした IDE が Sun ONE Application Server 7 を使って正しく機能していることが確認されました。

次の手順では、セッション Bean のメソッドを実行しますが、省略してもかまいません。

13. (省略可能) セッション Bean のメソッドを実行します。

a. Web ブラウザの

`http://admin-server-host:admin-server-portnumber/helloTest_TestApp/dispatch.jsp` ページで、`hello.helloTest create` の隣りの「Invoke」ボタンをクリックします。

ページの最初にある「Invoke」ボタンをクリックしてください。

「`hello.helloTestHome` でメソッドを呼び出す」の下にあるボタンです。ブラウザページが再表示されます。

b. ブラウザページの「EJB ナビゲーション」区画で `hello.helloTest [7]` をクリックします。

実際には、Web ブラウザに 7 以外の数字が表示されるかもしれません。

c. `java.lang.String sayHello` 横の「Invoke」をクリックします。

ページが再表示されて、「最後のメソッド呼び出しの結果」セクションに以下が表示されます。

```
Hello there, Studio!
```

```
呼び出したメソッド: sayHello()
```

```
パラメータ:
```

```
なし
```

これで、セッション Bean のメソッドを実行したことになります。

第8章

IDE でのデータベースの使用

この章では、Java™ DataBase Connectivity (JDBC™) ソフトウェアの構成方法を説明します。説明のほとんどは、Sun ONE Studio の多くのプログラム例とチュートリアルで使用されている PointBase Server 4.2 Restricted Edition (PointBase) に関する情報です。IDE でほかのデータベースを使用するための一般的な情報も示されています。

PointBaseは、Sun ONE Studio の標準インストールの一部として提供されるデフォルトのデータベースです。PointBaseは、Sun ONE Application Server 7 のインストールサブディレクトリ (たとえば `s1studio-install-directory\appserver7\pointbase`) に格納されています。

この章は、以下の節で構成されています。

- 49 ページの「PointBase 接続の設定」
- 54 ページの「PointBase サーバーとコンソールの使用」
- 55 ページの「他の JDBC 対応データベースの利用」

PointBase 接続の設定

エンタープライズアプリケーションは JDBC API を使ってデータベースとの対話を行います。エンタープライズアプリケーションでは、システムのビジネスオブジェクトがデータベースアクセスを共有できるように、データベース接続のプールを必要とします。JDBC データソースにより、データベースへの接続を作成できます。持続マネージャは、コンテナにインストールされたエンティティ Bean の持続性を管理するコンポーネントです。接続プール、JDBC データソース、および JDBC 持続マネージャは、接続リソースと呼ばれます。

Sun ONE Application Server 7 でデータベースを使用するエンタープライズアプリケーションを配備して実行する前に、アプリケーションサーバー環境でデータベースの JDBC ドライバを使用可能にし、この3つの接続リソースを作成する必要があります。

IDE と Sun ONE Application Server 7 をともにインストールすると、以下のことが行われます。

- PointBase JDBC ドライバが自動的にインストールされます。
- 管理者特権を持つ Microsoft Windows ユーザーに対しては、IDE インストーラによって 3 つの PointBase 接続リソースも自動的に作成されるため、IDE のプログラム例やチュートリアルを簡単に使用できます。詳しくは 50 ページの「PointBase リソース構成を確認する」を参照してください。

管理者特権を持たない IDE の Microsoft Windows ユーザー、Solaris OS ユーザー、および Linux OS ユーザーが Sun ONE Studio のプログラム例やチュートリアルを使用する場合は、51 ページの「プログラム例とチュートリアル用に PointBase JDBC リソースを設定する」の手順に従って PointBase リソースを構成してください。

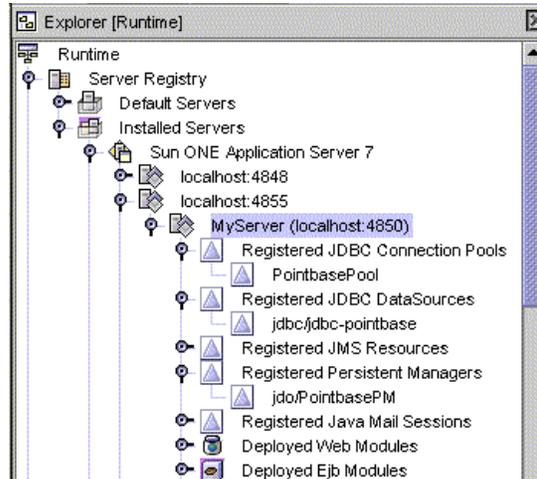
IDE のインストールとは別に Sun ONE Application Server 7 をインストールした場合に IDE のプログラム例やチュートリアルを使用するときは、52 ページの「IDE で PointBase の外部インストールを使用する」を参照してください。

▼ PointBase リソース構成を確認する

1. IDE の「エクスプローラ」の「実行時」タブで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。
2. デフォルト管理サーバーノード (localhost:4848) を展開して、デフォルトアプリケーションサーバーノード (server1(localhost:xxxx)) を展開します。
変数 `xxxx` は、アプリケーションサーバーインスタンスに割り当てられたポート番号です。
3. 「JDBC 接続プール」、「JDBC データソース」、および「持続マネージャ」の登録リソースを展開します。

IDE インストーラによって Sun ONE Application Server 用に PointBase 接続リソースが構成された場合は、以下のノードが表示されます。

- JDBC 接続プール: PointbasePool
- JDBC データソース: jdbc/jdbc-pointbase
- 持続マネージャ: jdo/PointbasePM



▼ プログラム例とチュートリアル用に PointBase JDBC リソースを設定する

通常スーパーユーザー特権なしで IDE を実行する Solaris および Linux 環境のユーザーは、アプリケーションサーバー環境で PointBase JDBC リソースを設定する必要があります。この作業を行うことで、Sun ONE Studio のプログラム例とチュートリアルの多くを実行するための JDBC 接続リソースが作成されます。

注 – この作業を行う前に、管理サーバーとアプリケーションサーバーの両方が動作していることを確認してください (42 ページの「Sun ONE Application Server 7 の使用」を参照)。

1. IDE の「エクスプローラ」の「実行時」タブで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。
2. アプリケーションサーバーインスタンスを探します。
これは *app-server-name (app-server-host:app-server-port)* と表されています。たとえば、MyServer (localhost:4850) と表示されています。
3. アプリケーションサーバーインスタンスノードを右クリックし、コンテキストメニューから「PointBase JDBC リソースを事前構成」を選択します。
砂時計のようなタイマーアイコンが表示されます。処理が完了すると、カーソルは通常のアイコンに戻ります。

4. 「JDBC 接続プール」、「JDBC データソース」、および「持続マネージャ」の登録リソースを展開します。

以下のノードが表示されます。

- JDBC 接続プール: PointbasePool
- JDBC データソース: jdbc/jdbc-pointbase
- 持続マネージャ: jdo/PointbasePM



▼ IDE で PointBase の外部インストールを使用する

IDE の外部に PointBase をインストールした場合は、以下の作業を行って IDE を PointBase の外部インストールに接続してください。インストールされた PointBase にアクセスできない場合は、Sun ONE Studio のプログラム例とチュートリアルを使用する前に PointBase をインストールする必要があります。PointBase のインストール方法については、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』を参照してください。

この作業では IDE インストールディレクトリに書き込みを行うため、スーパーユーザーまたは管理者特権が必要です。

1. ファイルシステムで、PointBase インストールディレクトリを探します。

システムにすでに Sun ONE Application Server 7 がインストールされていた場合は、PointBase はその一部としてインストールされている可能性があります。*slas7installdirectory* で *pointbase* サブディレクトリを探してください。

PointBase を Sun のほかのソフトウェアとは別個にインストールした場合は、PointBase のインストールディレクトリを探してください。

2. PointBase のインストールディレクトリから `pbclientxxx.jar` JDBC ドライバライブラリファイルを探します。
3. `pbclientxxx.jar` ファイルを `s1studio-install-directory/lib/ext` ディレクトリにコピーします。
これで PointBase JDBC ドライバが使用可能になります。
4. IDE を再起動します。
5. IDE で、「ツール」→「PointBase ネットワークサーバー」→「構成」を選択します。
「PointBase を構成」ダイアログが表示されます。
6. テキストフィールドに PointBase のインストールディレクトリとサーバーのポート番号を入力して、「了解」をクリックします。
これで IDE から PointBase サーバーとコンソールを起動できます。
7. IDE の「エクスプローラ」の「実行時」タブで、該当するアプリケーションサーバーインスタンスを選択します。
これは `app-server-name (app-server-host:app-server-port)` と表されています。たとえば、デフォルトサーバーは `server1(localhost:80)`、標準ユーザーのサーバーは `MyServer (localhost:4850)` のようになります。
8. アプリケーションサーバーインスタンスノードを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
「プロパティ」ウィンドウが表示されます。
9. 「クラスパス接頭辞」プロパティのプロパティエディタを開きます。
このプロパティの値フィールドをクリックしてから、表示された省略符号ボタン (...) をクリックします。「クラスパス接頭辞」エディタウィンドウが表示されます。
10. 「JAR/ZIP を追加」ボタンをクリックします。
「JAR ファイルを追加」のファイル検索機能を使って、`pbclientxxx.jar` ファイルを検索します。
11. `pbclientxxx.jar` ファイルを選択して、「了解」をクリックします。
12. 「了解」をクリックしてプロパティエディタウィンドウを閉じます。
これで Sun ONE Application Server 7 実行時の外部 PointBase JDBC ドライバが使用できるようになります。

PointBase サーバーとコンソールの使用

このデータベースソフトウェアの詳しい使い方は、
`s1studio-install-directory/appserver7/pointbase/docs` ディレクトリで
PointBase のマニュアルを参照してください。

IDE で開発したアプリケーションから PointBase データベースにアクセスしたり、
PointBase ソフトウェアを使用して表またはデータベースを作成する場合は、前もっ
て PointBase データベースサーバーを起動しておく必要があります。

▼ PointBase サーバーを起動する

1. IDE のメインウィンドウから「ツール」→「PointBase ネットワークサーバー」を選
択します。
2. 「サーバーを起動」を選択します。
PointBase 4.2 のウィンドウが表示されます。

▼ PointBase サーバーを停止する

1. IDE のメインウィンドウから「ツール」→「PointBase ネットワークサーバー」を選
択します。
2. 「サーバーを停止」を選択するか、PointBase 4.2 ウィンドウから「サーバー」→
「シャットダウン」を選択します。

▼ PointBase クライアントコンソールを起動する

1. PointBase サーバーの動作中に IDE のメインウィンドウから「ツール」→
「PointBase ネットワークサーバー」を選択します。
2. 「コンソールを起動」を選択します。
「Connect to Database」というダイアログが表示されます。
3. 「了解」をクリックして次に進みます。

▼ PointBase クライアントコンソールを停止する

以下のいずれかを行います。

- 「コンソール」メニューから「ファイル」→「終了」を選択します。

または

- IDE のメインウィンドウから「ツール」→「PointBase ネットワークサーバー」→
「コンソールを停止」を選択します。

他の JDBC 対応データベースの利用

この節の情報は、PointBase Server 4.2 Restricted Edition 以外のデータベースドライバを使用する場合にのみ有効です。

PointBase について説明されている以下と同様の作業を実行することで、ほかのデータベースに接続するように Sun ONE Application Server 7 を構成できます。

- データベースの JDBC ドライバを使用可能にする
- 接続プールを作成する
- JDBC データソースを作成する
- JDBC 持続マネージャを作成する

ほかの JDBC ドライバを使用可能にするには、Sun ONE Studio IDE を起動する前にデータベースのドライバファイルを *s1studio-install-directory/lib/ext* ディレクトリに配置する必要があります。こうすることによって、「データベーススキーマ」ウィザードで新しいスキーマを作成するときに適切なドライバを選択できるようになります。IDE のエクスプローラにドライバファイルをマウントすることはできません。また、CLASSPATH 環境変数に単にドライバファイルの場所を追加するだけでは機能しません。ドライバファイルを *lib/ext* ディレクトリにコピーする必要があります。

ほかのデータベースの接続リソースの構成については、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』を参照してください。このマニュアルは <http://docs.sun.com/doc/817-0599> から使用できます。

Oracle データベースとともに IDE を使用する場合は、Sun ONE Studio Developer Resources ポータル (<http://forte.sun.com/ffj/documentation/tutorialsandexamples.html>) で『Sun ONE Studio 5 J2EE アプリケーションチュートリアル』を参照してください。

第9章

IDE での BEA WebLogic Server の使用

Sun ONE Studio の標準インストールでは、Sun ONE Application Server 7, Standard Edition がデフォルトのアプリケーションサーバーとして構成されます。しかし IDE では、ほかのアプリケーションサーバーも使用できます。この章では、WebLogic サーバーを使用するための IDE 環境の構成方法を説明します。

IDE のインストールでは、BEA WebLogic Server バージョン 6.1 SP4 および 7.0 SP2 の 2 つがサポートされています。

この章は、以下の節で構成されています。

- 57 ページの「WebLogic 環境の構成」
- 61 ページの「マルチユーザー環境の WebLogic サポート」

WebLogic 環境の構成

WebLogic サーバープラグインモジュールは、IDE とともにインストールされますが、使用可能にはなっていません。BEA WebLogic Server 6.1 または 7.0 を使用するには、以下の作業を行う必要があります。

- 使用する WebLogic Server バージョンのプラグインサポートを有効にします。58 ページの「WebLogic サーバープラグインサポートを有効にする」を参照してください。
- WebLogic サーバーをデフォルトのアプリケーションサーバーとして設定します。59 ページの「WebLogic サーバーをデフォルトアプリケーションサーバーとして設定する」を参照してください。
- WebLogic サーバーを起動するように IDE を構成します。60 ページの「WebLogic サーバーを起動するように IDE を構成する」を参照してください。

▼ WebLogic サーバープラグインサポートを有効にする

注 – この作業は、J2EE プラットフォームのコンポーネントを含むディレクトリを IDE のファイルシステムにマウントしたままで行わないでください。

1. IDE を起動します。
詳細は、第 5 章を参照してください。
2. IDE のメインウィンドウから「ツール」→「設定ウィザード」を選択します。
「設定ウィザード」が開き、「Sun ONE Studio 基本設定」ページが表示されます。
3. 「次へ」をクリックします。
「モジュールのインストール」ページが表示されます。
4. 「J2EE サポート」ノードを展開します。
モジュールの一覧が、バージョン情報とそのモジュールが使用可能かどうかの情報とともに表示されます。
5. 「WebLogic サーバー配備モジュール」を探し、「使用可能」列を「True」に設定します。
6. (省略可能、ただし推奨) Sun ONE Application Server を使用しない場合は、その「使用可能」列の値を切り換えて「False」に設定し、これを使用不可にします。
使用しないプラグインのサポートを無効にすることで、IDE 実行中の負荷が減少します。
7. 「完了」をクリックします。
IDE は当初デフォルトで WebLogic Server 7 をサポートするようにインストールされています。この作業を行うと一般的な WebLogic サーバーのサポートが有効になり、「サーバーレジストリ」に WebLogic Server 7 のエントリが作成されます。
 - WebLogic Server 7 を使用する場合は、59 ページの「WebLogic サーバーをデフォルトアプリケーションサーバーとして設定する」に進んでください。
 - WebLogic Server 6.1 を使用する場合は、手順 8 に進んでください。
8. (WebLogic Server 6.1 の場合) WebLogic Server 6.1 固有のプラグインを有効にするには、以下の手順に従います。
 - a. 「ツール」→「オプション」を選択します。
「オプション」ページが表示されます。

- b. 「デバッグと実行」ノードを展開して、「WebLogic プラグインオプション」エントリーを選択します。
プロパティシート値がページの右側に表示されます。
- c. 「WebLogic Server 6 サポート」プロパティを「True」に設定します。
- d. (省略可能、ただし推奨) WebLogic Server 7 を使用しない場合は、「WebLogic Server 7 サポート」を「False」に設定します。
使用しないプラグインのサポートを無効にすることで、IDE 実行中の負荷が減少します。
- e. 「閉じる」をクリックします。
- f. 59 ページの「WebLogic サーバーをデフォルトアプリケーションサーバーとして設定する」に進みます。

▼ WebLogic サーバーをデフォルトアプリケーションサーバーとして設定する

1. IDE の「エクスプローラ」ウィンドウで「実行時」タブを選択し、「サーバーレジストリ」ノード、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。
使用可能な WebLogic Server ノードが表示されます。
2. 「WebLogic Server」ノードを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
WebLogic サーバーのプロパティシートが表示されます。
3. 「WebLogic ホーム」プロパティを選択します。
4. 適切なプロパティ値を入力して、プロパティシートを閉じます。たとえば、Microsoft Windows システムの場合は、以下のように入力します。
 - `bea-install-dir\weblogic700` (WebLogic Server 7.0 の場合)
 - `bea-install-dir\wlserver6.1` (WebLogic Server 6.1 の場合)変数 `bea-install-dir` は、WebLogic サーバーのインストールディレクトリへのパス名に置き換えてください。
5. 選択した WebLogic サーバーのノードを右クリックして「サーバーインスタンスを追加」を選択し、WebLogic サーバーインスタンスを追加します。
6. 以下の手順に従って、プロパティシートでパスワードを設定します。
 - a. 作成された「WebLogic サーバーインスタンス 1」ノードを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
インスタンスのプロパティシートが表示されます。

- b. 「パスワード」プロパティを選択して、WebLogic サーバーのインストール中に指定したパスワードを入力します。
 - c. (WebLogic Server 7 の場合のみ) 「ルートディレクトリ」プロパティをサーバーの `config.xml` ファイルの場所に設定します。
たとえば、`bea-install-dir/user_projects/mydomain` のように設定します。
 - d. プロパティシートを閉じます。
7. 「WebLogic サーバーインスタンス 1」を右クリックして、「デフォルトアプリケーションサーバーとして設定」を選択します。
- これで WebLogic サーバーが、IDE がデフォルトで使用するアプリケーションサーバーになりました。

注 – WebLogic Server 7.0 を使用するには、CMP Bean のデータソースを `DataSources` ではなく `TxDatasources` にしなければなりません。この条件は WebLogic Server 6.1 の場合とは異なり、アプリケーションを WebLogic Server 7.0 に配備したときにメッセージとして表示されます。詳細については、BEA のサイト (<http://edocs.bea.com/wls/docs70/faq/jdbc.html>) を参照してください。

▼ WebLogic サーバーを起動するように IDE を構成する

IDE から WebLogic サーバーを起動するには、「起動時 Java オプション」プロパティを設定する必要があります。

1. IDE で「エクスプローラ」の「実行時」タブを選択します。
2. 「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」サブノードを展開します。
3. 「WebLogic Server」ノードを展開し、インスタンスノードを表示します。
4. 変更したいインスタンスを選択して、「WebLogic サーバーインスタンス」ノードを右クリックし、「プロパティ」を選択します。
このインスタンスの「プロパティ」ウィンドウが表示されます。
5. 「起動時 Java オプション」プロパティで、テキストフィールドに次のように入力します。
`-Djavaplugin.enabled=true`

6. (省略可能) 必要な場合は、「追加クラスパス」および「追加ライブラリパス」プロパティを使用して、WebLogic サーバーの追加の Java クラスパスやネイティブライブラリを指定します。

これらのプロパティは、手順 4 で説明したようにアクセスできる「WebLogic Server」プロパティシートにあります。

7. (省略可能) WebLogic サーバーで WebLogic のインストールに含まれるサンプル PointBase サーバーといった外部リソースを使用する場合は、IDE から WebLogic サーバーを起動する前にこれらのリソースを使用可能にしてください。

IDE は外部の依存性を自動的に検出しません。PointBase の外部インストールの構成については、第 8 章を参照してください。

マルチユーザー環境の WebLogic サポート

システム管理者がマルチユーザー環境で WebLogic プラグインサポートを有効にする場合のために、コマンド行の構成スクリプトが提供されています。マルチユーザー環境を設定するシステム管理者は、このコマンド行機能を使って全ユーザーに対して WebLogic サーバーサポートを有効にし、Sun ONE Application Server 7 を無効にできます。

注 - この作業は、IDE を最初に起動する前に行う必要があります。

▼ マルチユーザー環境で WebLogic プラグインサポートを有効にする

1. スーパーユーザーになります。
2. IDE インストールディレクトリに変更します。

```
# cd s1studio-install-directory/bin
```

Solaris システムの場合、デフォルトは *s1studio-install-directory/opt/studio5_se* になります。

3. `enable` オプションを使って構成スクリプトを実行します。

```
# ./plugin_config.sh -enable weblogic
```

4. Solaris システムで Sun ONE Application Server 7 を使用不可にするには、以下のよう
に `disable` オプションを使用します。

```
# ./plugin_config.sh -disable S1AS
```

第10章

インストールのアップグレード

この章は、以下の節で構成されています。

- 63 ページの「アップデートセンターを利用したモジュールの更新」
- 64 ページの「「ライセンスマネージャ」ツールの使用」

アップデートセンターを利用したモジュールの更新

IDE をシステムにインストールした後、アップデートセンターを利用して新しい IDE モジュールを追加したり、既存の IDE モジュールを更新したりすることができます。

▼ IDE モジュールを更新する

1. IDE の開始画面で「アップデートセンター」ボタンをクリックするか、IDE のメインウィンドウから「ツール」→「アップデートセンター」を選択します。
「アップデートセンター」ウィザードが表示されます。
2. アップデートセンターとして「Sun ONE Studio アップデートセンター」を選択し、NetBeans アップデートセンターの選択を解除します。
3. プロキシを構成していない場合は、「プロキシ構成」ボタンをクリックします。
「プロキシ構成」ダイアログが表示されます。値を変更して「了解」をクリックし、「アップデートセンターウィザード」に戻ります。

4. 「次へ」をクリックして、Sun ONE Studio アップデートセンターへのログイン名とパスワードを入力します。
アップデートセンターからダウンロード可能なモジュールの一覧が表示されます。
5. モジュールを個別に選択するか、「>>」ボタンをクリックすることによってすべてのモジュールを選択します。
「<」ボタンを使用すると、自身のプラットフォームに相当ではないバージョンを削除することができます。
6. 「次へ」をクリックし、アップデートセンターのインストール手順に従って操作を進めます。
選択したモジュールがインストールされ、IDE が自動的に再起動します。
アップデートセンターの仕組みと個人情報に関する Sun のプライバシーポリシーについての詳細は、Developer Resources Site FAQ (<http://forte.sun.com/ffj/feedback/sitefaq.html>) を参照してください。

「ライセンスマネージャ」ツールの使用

Sun ONE Studio 5 IDE では、「ライセンスマネージャ」ツールを使って、既存のライセンスの確認や、試用ライセンスシリアル番号から正規シリアル番号へのアップグレードを行うことができます。60 日試用ライセンスシリアル番号を使って IDE をインストールした場合は、有効期限が近づくと警告メッセージが表示されます。60 日試用期間中は、いつでも製品を購入して正規ライセンスシリアル番号を入手できます。

以下の手順に従うことで、「ライセンスマネージャ」を使ってライセンス情報を表示したり、正規シリアル番号にアップグレードできます。

▼ ライセンスの状態を表示する

試用期間中は、「ライセンスマネージャ」ツールを使って有効期限までの残日数を確認できます。

1. IDE のメインウィンドウから「ツール」→「ライセンスマネージャ」を選択します。
「ライセンスマネージャ」が表示されます。
2. 「シリアル番号のレポート」タブをクリックします。
「シリアル番号のレポート」ページが表示されます。シリアル番号を確認し、試用ライセンスか正規ライセンスかを調べ、有効期限までの残日数をチェックできます。

▼ 正規ライセンスにアップグレードする

試用期間中は、以下の手順に従っていつでも正規シリアル番号にアップグレードできます。60日間の試用期間が有効期限切れになった場合は、IDEを起動しようとするときの「シリアル番号のインストール」ページが表示されます。このときに新しい正規シリアル番号を入力できます。正規シリアル番号は、製品購入時に提供されます。

注 - 正規シリアル番号のインストールは、IDEをインストールしたときと同じユーザー特権を使って実行する必要があります。たとえば、Solarisの場合、インストールはスーパーユーザーで実行する必要があるため、ライセンスシリアル番号をアップグレードするときもスーパーユーザーでIDEを実行する必要があります。

1. スーパーユーザーになるか、管理者特権を使ってシステムにログインします。
IDEを自身でインストールしなかった場合は、システム管理者に問い合わせてください。
1. IDEを起動します。
2. IDEのメインウィンドウから「ツール」→「ライセンスマネージャ」を選択します。
「ライセンスマネージャ」が表示されます。
3. 「シリアル番号のインストール」タブをクリックします。
「シリアル番号のインストール」ページが表示されます。
4. テキストボックスに正規シリアル番号を入力して、「インストール」をクリックします。

第11章

IDE のアンインストール

Sun ONE Studio 5 IDE を削除する場合は、アンインストーラウィザードを使用します。IDE と Sun ONE Application Server をアンインストールするときは、インストール時と同じユーザー特権を使用する必要があります。Solaris または Linux システムの場合は、スーパーユーザー、Microsoft Windows システムの場合は、管理特権が必要です。

この章では、サポートされている各プラットフォームについてアンインストール方法を説明します。

- Microsoft Windows システムの場合は、67 ページの「IDE をアンインストールする (Microsoft Windows プラットフォーム)」を参照してください。
- Linux システムの場合は、69 ページの「IDE をアンインストールする (Linux システム)」を参照してください。
- Solaris OS の場合は、71 ページの「IDE をアンインストールする (Solaris OS)」を参照してください。

アンインストーラの使用

▼ IDE をアンインストールする (Microsoft Windows プラットフォーム)

Windows オペレーティング環境でアンインストールするには、Microsoft Windows の「アプリケーションの追加と削除」ユーティリティを使用します。

1. この作業を開始する前に、IDE を終了してシャットダウンします。
2. システムに J2SE バージョン 1.4.1_02 以上があることを確認します。

3. 「スタート」>「設定」>「コントロールパネル」を選択します。
「コントロールパネル」ダイアログが表示されます。
4. 「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。
5. 現在インストールされているプログラムの一覧から「Sun ONE Studio 5, Standard Edition」を選択します。
6. 「変更と削除」をクリックします。
InstallShield ウィザードによってアンインストーラウィザードが準備されて、「開始」パネルが表示されます。
7. 「次へ」をクリックして指示に従います。
アンインストールが完了すると、最後の概要パネルが表示されます。
8. 「終了」をクリックします。
9. *s1studio-install-directory* をチェックします。
アンインストールに成功すると、以下のファイルとフォルダが残されます。

s1studio-install-directory

install.log
uninstall.log

s1studio-install-directory\appserver7

statefile
uninstall.exe
uninstall.log

s1studio-install-directory\appserver7\bin

icudt2.dll
icuin2.dll
icule2.dll
icuuc2.dll

s1studio-install-directory\appserver7\bin\lib

s1studio-install-directory\appserver7\bin\share\bin

s1studio-install-directory\appserver7 ディレクトリにほかのファイルが含まれている場合は、追加製品をインストールしたか、アンインストールが不完全なことが考えられます。詳細は、84 ページの「不完全なアンインストールの識別と修正」を参照してください。

注 – *s1studio-user-directory* は、アンインストール時に削除されません。

10. `s1studio-install-directory\uninstall.log` ファイルでエラーメッセージを調べます。
11. アンインストールが成功した場合は、残っているディレクトリとファイルを削除できます。

▼ IDE をアンインストールする(Linux システム)

注意 – Linux システムからこのソフトウェアをアンインストールするには、Sun ONE Studio アンインストーラを使用する必要があります。rpm `-e` コマンドを使って IDE をアンインストールしないでください。アンインストーラを使用しないと、システムが壊れる場合があります。

1. この作業を開始する前に、IDE を終了してシャットダウンします。
2. システムに J2SE バージョン 1.4.1_02 以上があることを確認します。
3. 表示環境変数をローカルマシンの表示に設定します。
たとえば、bash シェルを使用している場合は、以下のように入力します。

```
% export DISPLAY=your-local-machine:0.0
```

4. スーパーユーザーになります。
5. アンインストーラウィザードを起動します。

```
# java -jar /s1studio-install-directory/_uninst/uninstall.jar
```

アンインストーラの開始画面が表示されます。

6. 「次へ」をクリックして指示に従います。
アンインストーラウィザードによって IDE がアンインストールされます。
7. 「終了」をクリックします。

8. *s1studio-install-directory* をチェックします。

アンインストールが成功すると、以下のディレクトリとファイルが残されます。

s1studio-install-directory

uninstall.log

install.log

s1studio-install-directory/appserver7

uninstall

statefile

uninstall.log

s1studio-install-directory/_uninst

s1studio-install-directory/appserver7 ディレクトリにほかのファイルが含まれている場合は、追加製品をインストールしたか、アンインストールが不完全なことが考えられます。

注 – *s1studio-user-directory* は、アンインストール時に削除されません。

9. *s1studio-install-directory/uninstall.log* ファイルでエラーメッセージを調べます。

アンインストールが不完全と思われる場合は、第 12 章で説明している修正方法を参照してください。

10. アンインストールが成功した場合は、残っているディレクトリとファイルを削除できます。

```
# rm -r s1studio-install-directory
```

このコマンドは、ログファイルとインストールディレクトリを削除する場合にだけ使用してください。このコマンドを使って製品ファイルをアンインストールしてはいけません。これらのログファイルとこれらが格納されているディレクトリを削除する前に、アンインストーラの実行が成功していることが必要です。

11. スーパーユーザー特権から抜けます。

▼ IDE をアンインストールする (Solaris OS)

注意 – Solaris システムからこのソフトウェアをアンインストールする場合は、Sun ONE Studio アンインストーラを使用してください。rm -r または pkgrm コマンドを使って IDE をアンインストールしないでください。アンインストーラを使用しないと、システムが壊れる場合があります。

1. この作業を開始する前に、IDE を終了してシャットダウンします。
2. システムに J2SE バージョン 1.4.1_02 以上があることを確認します。
3. 以下を入力して X サーバーへのクライアントアクセスを有効にします。

```
% xhost + your-machine-name
```

4. 表示環境変数をローカルマシンの表示に設定します。

```
% setenv DISPLAY your-machine-name:0.0
```

5. スーパーユーザーになります。
6. アンインストーラウィザードを起動します。

```
# java -jar /s1studio-install-directory/_uninst/uninstall.jar
```

開始画面が表示されます。

7. 「次へ」をクリックして指示に従います。
アンインストーラウィザードによって IDE がアンインストールされます。
8. 「終了」をクリックします。

9. *s1studio-install-directory* をチェックします。

アンインストールが成功すると、以下のディレクトリとファイルが残されます。

s1studio-install-directory

uninstall.log

install.log

s1studio-install-directory/appserver7

uninstall

statefile

uninstall.log

s1studio-install-directory/_uninst

s1studio-install-directory/appserver7 ディレクトリにほかのファイルが含まれている場合は、追加製品をインストールしたか、アンインストールが不完全なことが考えられます。

注 – *s1studio-user-directory* は、アンインストール時に削除されません。

10. *s1studio-install-directory/uninstall.log* ファイルでエラーメッセージを調べます。

アンインストールが不完全と思われる場合は、第 12 章で説明している修正方法を参照してください。

11. アンインストールが成功した場合は、残っているディレクトリとファイルを削除します。

```
# rm -r s1studio-install-directory
```

このコマンドは、ログファイルとインストールディレクトリを削除する場合にだけ使用してください。このコマンドを使って製品ファイルを削除してはいけません。これらのログファイルとこれらが格納されているディレクトリを削除する前に、アンインストーラの実行が成功していることが必要です。

12. クライアントアクセスを使用不可にして、スーパーユーザー特権から抜けます。

```
# xhost - your-machine-name  
# exit
```

第12章

障害追跡

この章では、以下の作業中に問題が発生した場合に障害を追跡するためのヒントを説明します。

- 74 ページの「solaris_patch_installer を使った Solaris 8 OS パッチインストール時の問題」
- 75 ページの「IDE インストール時の問題」
- 80 ページの「IDE 起動時の問題」
- 81 ページの「「スタート」メニュー項目使用時の問題 (Microsoft Windows プラットフォーム)」
- 81 ページの「Web サービス実行時の問題」
- 83 ページの「UDDI を使用する Web サービス実行時の問題」
- 84 ページの「WebLogic 6.1 または 7.0 使用時の問題」
- 84 ページの「不完全なアンインストールの識別と修正」

solaris_patch_installer を使った Solaris 8 OS パッチインストール時の問題

表 12-1 に、solaris_patch_installer スクリプトを使った場合に発生する可能性のある問題を示します。

表 12-1 solaris_patch_installer の問題

問題	対策
Solaris 8 OS を新規インストールした環境で solaris_patch_installer を実行すると次のようなエラーメッセージが表示される。 # ./solaris_patch_installer J2SE v.1.4.1 の Solaris パッチインストールプログラム インストール中 109147-14... インストールに成功しました インストール中 108434-06... ... インストール中 108773-12... pkgadd に失敗しました パッチのインストールを継続できません 詳細については /var/tmp/solaris_patch_installer.log を参照してください	solaris_patch_installer スクリプトをもう一度実行してください。問題が再発する場合は、Solaris システム管理者に連絡してください。 このエラーは、スクリプトに含まれているものより最新のパッチバージョンがシステムにインストールされている場合に発生します。スクリプトは古いパッチバージョンをインストールしません。まれに、スクリプトが次にインストールするパッチが古いパッチへの明示的な依存性を持つ場合があります。この場合は、システムにインストールされているパッチを調べ、付録 A に示されているパッチを使用して対策を決定する必要があります。この作業は、経験を積んだシステム管理者が行うのが最適です。solaris_patch_installer がパッチをインストールする順序が重要であることに注意してください。パッチは付録 A に示されている順序にインストールされます。

IDE インストール時の問題

表 12-2 は、IDE のインストール時に発生する可能性があるいくつかの問題をまとめています。

表 12-2 Sun ONE Studio 5 IDE インストール時の問題

問題	対策
Sun ONE Studio 5 IDEのインストール中に次のエラーメッセージが表示される。 Error writing file = There may not be enough temporary disk space. Try using -is:tempdir to use a temporary directory on a partition with more disk space	-is:tempdir コマンド行オプションを使用してインストーラを起動してください。このオプションで、より多くの空き領域があるディレクトリを指定します。NFS マウントしたファイルシステムのディレクトリは指定しないでください。また、シンボリックリンクを使用したディレクトリは指定しないでください。 たとえば Solaris オペレーティング環境の場合は、コマンドプロンプトで以下のように入力します。 <pre>\$ s1s5se-sol-sparc-ml.bin -is:tempdir temporary-directory</pre>
インストーラで問題が発生し、インストーラに使用するディスクの空き領域が不足していることを示すメッセージが表示される。しかし、IDE のインストールに指定したファイルシステムには十分な空きディスク領域がある。	指定したファイルシステムが別のファイルシステムにシンボリックリンクされ、大きな空き領域を認識しないことが考えられます。たとえば Solaris 環境で、/export/home に 2G バイト、/ に 100M バイトの領域があるとします。そして /opt ディレクトリが /export/home にシンボリックリンクされていると仮定します。IDE のインストール先ディレクトリとして /opt/s1studio が指定された場合、Sun ONE Studio 5 インストーラは、/export/home へのシンボリックリンクを認識しません。インストーラが認識するのは、/opt のターゲットディレクトリで 100M バイトの空き領域しかない / ディレクトリだけです。 この問題を解決するには、大きい方の空きディスク領域があるファイルシステムをインストールディレクトリとして使用するよう IDE インストーラに直接指示します。
Sun ONE Studio 5 IDE のインストール中に次のエラーメッセージが表示される。 Error: Could not find JVM	-is:javahome コマンド行オプションを使用してインストーラを起動してください。このオプションで、J2SE プラットフォームのインストール先を指定します。 たとえば Solaris OS の場合は、コマンドプロンプトで以下のように入力します。 <pre>s1s5se-sol-sparc-ml.bin -is:javahome java-home-directory</pre>

表 12-2 Sun ONE Studio 5 IDE インストール時の問題 (続き)

問題	対策
<p>(UNIX のみ) インストーラが動作していないように見える。メッセージの表示はない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • DISPLAY 環境変数が正しく設定されていることを確認します。ローカルシステムにインストールする場合は、DISPLAY 環境変数を <code>your-machine-name:0.0</code> に設定します。 • <code>xhost + your-machine-name</code> コマンドを使って X サーバーへのアクセスを使用可能にしたことを確認します。 <p>Linux システムのインストールについては第 3 章、Solaris OS のインストールについては第 4 章を参照してください。</p> <p>このエラーは、DISPLAY 環境変数が正しく設定されていないことを示します。場合によっては、ドメインとホスト名が含まれていることを確認する必要があります。たとえば、以下のように入力します。</p> <pre>setenv DISPLAY your-machine-name.your-domain:0.0</pre>
<p>(Solaris OS のみ)</p> <pre>ERROR: could not initialize interface awt - exception: java.lang.NoClassDefFoundError java.lang.NoClassDefFoundError at java.lang.Class.forName0(Native Method) at java.lang.Class.forName(Class.jav a:130 ... Wizard.getExitCode(): called after WizardServices is shutdown. Wizard.getExitCode(): called after WizardServices is shutdown.</pre>	<pre>setenv DISPLAY your-machine-name.your-domain:0.0</pre>
<p>IDE インストーラが、インストールを行うことなく終了する。メッセージの表示はない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Sun ONE Studio 製品ダウンロードページからダウンロードしたファイルが不完全である可能性があります。ファイルを再度ダウンロードして、ダウンロードしたファイルのサイズと製品ダウンロードページに示されているサイズが同じであることを確認してください。その後 IDE インストーラを再度実行してください。 • <code>installer-name.sp</code> ファイルに無効なコマンド行パラメータが指定されています。ファイルをチェックして、コマンド行オプションを修正します。その後 IDE インストーラを再度実行します。詳しくは付録 D を参照してください。 • インストーラ起動ツール (<code>installer-name.exe</code> ファイルまたは <code>installer-name.bin</code> ファイル) を、<code>-is:log log.txt</code> オプションを使って実行します。<code>installer-name</code> には、プラットフォームに固有のインストーラファイル名を指定します。<code>log.txt</code> でエラーをチェックします。詳しくは付録 D を参照してください。
<p>(Solaris OS のみ) リモート CD ドライブを使ってインストールを試みると、「CD Mount Support」ダイアログに次のエラーが表示される。</p> <pre>No CD found. Please insert Sun ONE Studio 5 CD.</pre>	<p>NFS を通してマウントされたりリモート CD ドライブからインストールしようとしています。NFS はサポートされていません。リモート CD ドライブから直接インストーラを起動する必要があります。また、ローカルマシンに適切な J2SE プラットフォームバージョンがインストールされていることが必要です。以下の場所から Solaris インストーラを実行してください。</p> <pre><cdrom-path>/installers_se/s1s5se_sol-sparc-ml.bin</pre>

表 12-2 Sun ONE Studio 5 IDE インストール時の問題 (続き)

問題	対策
-is:tempdir コマンド行オプションが正しく機能しない。	<p>コマンド行オプションの構文に誤りがないことを確認してください。たとえば Solaris 環境の場合、構文は以下のようになります。</p> <pre>s1s5se_sol-sparc-ml.bin -is:tempdir temporary-directory.</pre> <p>NFS マウントしたファイルシステムのディレクトリは指定しないでください。</p>
Solaris 7 オペレーティング環境を実行するコンピュータに製品 CD を挿入したら「Not a supported platform」というエラーメッセージが表示された。	<p>Sun ONE Studio 5 IDE は Solaris 8 および Solaris 9 OS によってのみサポートされています。</p>
<p>(Solaris OS のみ) 以下のエラーメッセージが表示される。</p> <pre>ERROR: cannot find product/product.xml on your computer.</pre>	<p>システムのボリューム管理プロセス (vold) を一度停止して再開し、インストールプログラムを実行しなおします。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. CD-ROM やフロッピーディスクが使用されていないことを確認します。fuser コマンドを実行すると、その媒体を使用しているすべてのユーザーを確認できます。 2. スーパーユーザーになります。 3. ボリューム管理を停止します。 <pre># /etc/init.d/volmgt stop</pre> 4. ボリューム管理を再開します。 <pre># /etc/init.d/volmgt start</pre>
(Solaris OS のみ) インストーラを手動で実行したが、製品 CD を取り出せなくなった。	<p>インストーラを手動で実行した後で、ドライブから CD-ROM を取り出す前に CD-ROM ディレクトリの外に移動します。CD が使用されていることをシステムが検出しているため、CD-ROM を取り出すことができません。</p>
<p>(Linux RedHat 7.2 のみ) インストール時に、インストーラのコンポーネントパネルに次のメッセージが表示される。</p> <pre>PointBase を持つ Sun ONE Application Server 7 のインストール は、このプラットフォームではサポートされていません。</pre>	<p>Linux RedHat 7.2 プラットフォームはサポートされています。しかし、/etc/redhat-release システムファイルを変更すると、インストーラはプラットフォームが有効であることを認識できなくなります。</p> <p>インストーラは、「Red Hat Linux release 7.2」という値をシステムファイルで探します。</p>

表 12-2 Sun ONE Studio 5 IDE インストール時の問題 (続き)

問題	対策
<p>(Solaris OS) CD を挿入した後で、インストーラが起動したが、次のメッセージが表示された。</p> <p>次の理由により、インストールを継続できません: インストールを実行する場合、Sun ONE Studio 5 は、スーパーユーザーあるいは管理者権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。</p>	<p>この製品をインストールするための適切なアクセス権を持たない標準ユーザーとしてログインしました。以下のいずれかを行います。</p> <p>方法 1:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インストーラウィザードページで「完了」をクリックします。 2. 端末ウィンドウを開き、eject cdrom と入力します。 3. システムからログアウトします。 4. スーパーユーザーとしてシステムにログインします。 5. CD を再度挿入します。 <p>方法 2:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 端末ウィンドウを開きます。 2. xhost + your-machine-name と入力して、X サーバーへのアクセスを有効にします。 3. たとえば次のように入力して、DISPLAY 環境変数をローカルマシンに設定します。setenv DISPLAY your-machine-name:0.0 4. スーパーユーザーになります。 5. CD-ROM ディレクトリに変更します。 cd <cdrom-path> 6. インストーラを起動します。 ./install.sh と入力します。 7. インストールが完了したら、xhost - と入力して X サーバーを使用不可にして、スーパーユーザー特権から抜けます。 <p>適切なログイン権を持っていない場合は、システム管理者に連絡してください。</p>
<p>(Solaris OS のみ) インストール時に以下のエラーメッセージが表示される。</p> <p>J2SDK パッケージ SUNWj2rt あるいは SUNWj3rt がシステム上に見つかりません。インストーラを起動する前に、有効なパッケージベースの J2SE 1.4.1_02 (またはそれ以上) をインストールする必要があります。</p>	<p>Solaris OS からデフォルト Java パッケージの一部が削除されています。最小要件を満たすパッケージベースの J2SE プラットフォームをインストールする必要があります。詳しくは、第 1 章を参照してください。</p>

表 12-2 Sun ONE Studio 5 IDE インストール時の問題 (続き)

問題	対策
<p>(UNIX システム) インストーラの概要パネルにはインストールが成功したと示されているが、install.log ファイルには以下のエラーが示されている。</p> <pre>Setup.product.install, com.sun.installer. InstallApplicationServerAction, err, Error occured while installing [0] -> /s1studio-install-directory/appserver_in st/install.sh /s1studio-install-directory/appserver_in st statefile ../install.log where s1studio-install-directory is an NFS-mounted filesystem.</pre>	<p>このエラーは、UNIX システムで NFS マウントされたファイルシステムをインストールディレクトリとして指定した場合に発生します。このエラーの結果、IDE はインストールされますが、Sun ONE Application Server 7 はインストールされません。</p> <p>この場合は、IDE をアンインストールしてから、ローカルファイルシステムのディレクトリをインストールディレクトリとして指定して IDE を再インストールすることが推奨されます。詳しくは第 11 章を参照してください。</p> <p>必要な場合は、84 ページの「不完全なアンインストールの識別と修正」も参照してください。</p>
<p>(Microsoft Windows) インストーラまたはアンインストーラウィザードを終了した後で、WindowsNativeToolkit プロセスが CPU リソースの多くの割合を消費している。</p>	<p>WindowsNativeToolkit プロセスは、インストール時およびアンインストール時に起動します。これは正しく停止しないこともあります。Windows のタスクマネージャを使って WindowsNativeToolkit プロセスのインスタンスを検出し、これを終了してください。</p>
<p>(Solaris OS) インストーラの概要パネルにはインストールが成功したと示されているが、install.log ファイルには以下のエラーが示されている。Installing Appserver...</p> <pre>Existing Sun ONE Message Queue 3.0 installation has been detected. Silent installation cannot proceed. Please consult Installation Guide for upgrade information. Can't write statefile "s1studio-install-directory/appserver7/s tatefile" :java.io.FileNotFoundException: "s1studio-install-directory/appserver7/st atefile (No such file or directory) (date-time) Finished Installing Appserver7...</pre> <p>これは、Sun ONE Application Server がインストールされていないことを示します。</p>	<p>この問題は、すでに Sun™ One Message Queue 3.0 ソフトウェアがインストールされているシステムに Sun ONE Studio 5 をインストールしようとするときに発生します。これによって Sun ONE Application Server 7 はインストールできず、IDE のみがインストールされています。この問題を修正するには、以下の手順に従ってください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. pgkrm ユーティリティを使って Message Queue 3.0 をアンインストールします。このソフトウェアのアンインストール方法の詳細は、http://docs.sun.com/source/816-5928-10/index.html で『Sun ONE Message Queue Installation Guide』を参照してください。 2. IDE をアンインストールします。詳しくは71 ページの「IDE をアンインストールする (Solaris OS)」を参照してください。 3. Sun ONE Studio 5 を再インストールします。

IDE 起動時の問題

表 12-3 は、新規インストールした IDE の起動時と構成時に発生する可能性があるいくつかの問題をまとめています。

表 12-3 Sun ONE Studio 5 起動および設定時の問題

問題	対策
<p>IDE を起動するときに、次のようなエラーメッセージが表示される。</p> <pre>ERROR: The J2SE[tm] 1.2.1 found at /usr/java1.2/bin/java cannot be used by the IDE. J2SE[tm] 1.4.1_02 is recommended. NOTE: You can download and install the J2SE[tm] and related Solaris[tm] patches from http://access1.sun.com/forte/. Warning: Current runtime environment does not satisfy minimum requirements.</pre>	<p><code>\$JAVA_PATH</code> および <code>\$JDK_HOME</code> 環境変数の値は、IDE のインストール中に指定した J2SE プラットフォームのパスの値に優先します。それらの環境変数を設定解除するか、IDE を起動するときに <code>-jdkhome</code> コマンド行オプションを使用する必要があります。詳しくは第 5 章を参照してください。</p>
<p>IDE の動作パフォーマンスが悪い。</p>	<p>仮想記憶またはスワップ空間をマシンにインストールされている RAM の 1.5~2 倍に増やしてください。</p>

「スタート」メニュー項目使用時の問題 (Microsoft Windows プラットフォーム)

表 12-4 に、Microsoft Windows の「スタート」メニュー項目を使ってマニュアル、プログラム例、チュートリアルなど Web ページを表示する機能にアクセスするときに発生する可能性のあるエラーについて説明します。これらのエラーは、Microsoft Windows がブラウザ設定を解釈する方法によって発生します。

表 12-4 「スタート」メニューのエラー (Windows)

問題	対策
Web ページを表示する IDE メニュー項目を「スタート」メニューから選択すると、エラーメッセージが表示される。たとえば、以下のようなメッセージが表示される。 Error: Cannot find the file C:\Sun\studio5_se\docs\documentation.html. 1. Make sure the path and filename are correct and that all required libraries are available.	このエラーは、Microsoft Windows で Netscape ブラウザを使用しているときに発生します。Netscape を HTML ページを開くプログラムとして設定しているのに、デフォルトブラウザとしては設定していない場合は、このエラーが発生します。 「OK」をクリックしてエラーメッセージを消去してください。 この問題を解決するには、Netscape をデフォルトブラウザとして設定するか、HTML ページを開くプログラムとして Internet Explorer を設定します。
上記のエラーメッセージを消去した後、続けて以下のエラーメッセージが表示される。 Error: Unable to run this command.	「OK」をクリックしてエラーメッセージを消去してください。 Netscape をデフォルトブラウザに設定してください。

Web サービス実行時の問題

表 12-5 は、IDE がサポートするアプリケーションサーバーを使用する Web サービスの実行時に発生する可能性があるいくつかの問題をまとめています。

表 12-5 アプリケーションサーバーを使用する Web サービス 実行時の問題

問題	対策
<pre>[java.rmi.RemoteException: HTTP transport error: java.net.ConnectException: Connection refused; nested exception is: HTTP transport error: java.net.ConnectException: Connection refused</pre>	<ul style="list-style-type: none"> • Web サービスに変更を加えた後で、Web サービスの呼び出しを行う Web サービスクライアントを再表示しなかった場合に発生する例外です。Web サービスクライアントが呼び出す Web サービスに変更を加えたときに、そのクライアントを再表示するには、以下の作業を行います。Web サービスのクライアントノードを右クリックして、コンテキストメニューから「Web サービスから再表示」を選択します。これで、クライアントプロキシが再生成され、Web サービスに加えられた変更が反映されます。 • Web サービスを開発して配備した後で、ターゲット配備サーバーを変更し、Web サービスの SOAP RPC URL を変更していない場合に発生する例外です。これは、以下の手順で修正します。 <ol style="list-style-type: none"> 1. Web サービスのプロパティシートにある SOAP RPC URL プロパティを変更します。 2. 「Web サービス」ノードを右クリックして、「Web サービス ファイルを生成」を選択します。 3. デフォルトクライアントがある場合は、これを右クリックして「Web サービスから再表示」を選択します。 4. Web サービスを再配備します。
<pre>[java.rmi.RemoteException:cannot connect to server:Not found; nested exception is: cannot connect to server: Not found</pre>	<p>J2EE アプリケーションの Web モジュールの「Web コンテキスト」プロパティ値と、Web サービスの「SOAP RPC URL」プロパティに指定されたコンテキストルートが異なります。Web モジュールの「Web コンテキスト」プロパティを確認するには、以下の作業を行います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Web サービスの追加先の J2EE アプリケーションを開きます。 2. Web サービスの Web モジュール (名前が <code>_war</code> で終わるモジュール) を右クリックして、「プロパティ」を選択します。 3. 「Web コンテキスト」プロパティは、「プロパティ」ウィンドウで最後に表示されているプロパティです。 <p>Web サービスの「SOAP RPC URL」プロパティのコンテキストを確認するには、以下の作業を行います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「Web サービス」ノードを右クリックして、「プロパティ」を選択します。 2. 「SOAP RPC URL」プロパティには、以下のような値が表示されています。 <pre>http://localhost:8000/MyService/MyService</pre> この URL の <code>MyService</code> の最初のインスタンスは、コンテキストルートまたは Web コンテキストです。これは任意の値に変更できますが、J2EE アプリケーションの Web モジュールの「Web コンテキスト」プロパティ値もこの値である必要があります。

UDDI を使用する Web サービス実行時の問題

表 12-6 は、UDDI を使用する Web サービス実行時に発生する可能性があるいくつかの問題をまとめています。

表 12-6 UDDI を使用する Web サービス実行時の問題

問題	対策
<p>.wsdl ファイルを表示しようとすると、空の Web ページが表示される。</p>	<p>Netscape Web ブラウザの多くのバージョンで .wsdl ファイルは表示されません。.wsdl ファイルの内容は、ページのソースで確認してください。</p>
<p>「新規クライアント」ウィザードを使用して、UDDI レジストリ内を検索したときに例外の発生を示す次のメッセージが表示される。 IllegalArgumentException</p>	<p>パブリック UDDI レジストリを使用する場合は、IDE でユーザープロキシサーバー名とポート情報を設定する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none">• IDE のメインウィンドウから「ツール」→「設定ウィザード」を選択して、ユーザープロキシサーバー名とポート情報を指定してください。 <p>値を有効にするには、IDE を再起動する必要があります。</p>
<p>内部 UDDI レジストリサーバーが起動できず、例外の発生を示す次のメッセージが表示される。 jjava.lang.RuntimeException: RegistryServerServlet.initializeDB(...): com.sun.xnode.XNodeException: aborting connection attempt., RegistryServerServlet.init(...): connection: 1, Database failed to connect</p>	<p>以前の Xindice サーバーインスタンスが正常終了していないことが原因として考えられます。(Microsoft Windows システムの場合、サーバーのインスタンスを解放するには、OS の再起動が必要です。)</p> <ol style="list-style-type: none">1. その Xindice サーバーインスタンスに関連づけられている Java プロセスをすべて終了します。2. IDE を再起動します。 <p>内部 UDDI レジストリサーバーは、必ず以下の手順で終了してください。</p> <ol style="list-style-type: none">1. エクスプローラの「実行時」タブを選択します。2. 「UDDI サーバーレジストリ」ノードを展開します。3. 「内部 UDDI レジストリ」を右クリックし、コンテキストメニューから「サーバーを停止」を選択します。

WebLogic 6.1 または 7.0 使用時の問題

表 12-7 は、WebLogic Server 6.1 または 7.0 使用時に発生する可能性があるいくつかの問題をまとめています。

表 12-7 WebLogic Server 6.1 または 7.0 使用時の問題

問題	対策
WebLogic サーバーが、BEA Web サイトから XML ドキュメント定義をダウンロードできない。	WebLogic サーバーに J2EE アプリケーションクライアントを配備する場合は、サーバーが WebLogic の Web サイトから XML ドキュメントの定義をダウンロードできる必要があります。Web への接続にプロキシサーバーが必要な場合は、WebLogic サーバーにアプリケーションを配備する前に、必ず IDE でプロキシサーバーの設定を行ってください。プロキシサーバーを設定するには、「ツール」→「設定ウィザード」を選択し、プロキシおよび Web ブラウザの設定を指定します。
J2EE アプリケーションを実行すると、以下のエラーが発生する。 Error configuring application listener of class ...<JAXRPCContextListener> java.lang.ClassNotFoundException: ...<JAXRPCContentListener>	IDE の外から WebLogic サーバーを起動しました。IDE からサーバーを起動する方法については、60 ページの「WebLogic サーバーを起動するように IDE を構成する」を参照してください。 IDE の外からサーバーを起動する必要がある場合は、WebLogic クラスパス環境変数に以下を追加してください。たとえば、Microsoft Windows システムの場合は、 <code>s1studio-install-directory\jwsdp\jwsdp-common-lib\jwsdp-common.jar</code> を追加します。必要な場合は、WebLogic のマニュアルで詳細を参照してください。

不完全なアンインストールの識別と修正

すべての製品ファイルが削除される前に IDE アンインストーラウィザードが終了した場合は、一部のファイルやディレクトリなどのシステム項目が正しくアンインストールされていません。

以下のような場合は、アンインストールが不完全に終わっています。

- IDE をアンインストールした後に残されたディレクトリやファイルを調べた結果、すべてのファイルが正しく削除されていない。

第 11 章の該当するプラットフォームの節で、アンインストール時に削除されないファイルの一覧を参照してください。

- 製品のアンインストール後、別のインストールディレクトリを使用したり古いバージョンを削除したにもかかわらず、同じバージョンや新しいバージョンを再インストールできない。
この場合は、製品レジストリが壊れている可能性があります。
- IDE のアンインストール時にエラーメッセージが表示された、アンインストール処理が失敗した、またはアンインストールの失敗を示すメッセージがログに示されている。

アンインストールに失敗した場合は、同じ IDE バージョンや別の IDE バージョンを再インストールしようとしたり、Sun ONE Application Server 7 のスタンドアロンバージョンをインストールしようとする問題が発生します。

アンインストーラウィザードを使用しないでアンインストールを行った場合は、アンインストールが不完全であるか、正しくアンインストールされないことがあります。以下の項では、アンインストールが不完全に終わったと判断できる場合に、システムを修正するための方法を説明します。または、Sun ONE Studio Developer Resources ポータル (<http://forte.sun.com/ffj>) でナレッジベースを参照してください。

▼ 不完全なアンインストールを修正する (Microsoft Windows プラットフォーム)

1. 必ず管理者特権のあるユーザーとしてログインします。
2. `s1studio-install-directory` でアプリケーションサーバーのアンインストーラを探します。
デフォルトのインストールディレクトリは `%SystemDrive%\Sun\studio5_se` です。この実行可能ファイルがない場合は、手順 4 に進んでください。
3. アプリケーションサーバーのアンインストーラを実行して、手順 4 に進みます。

```
C:\> s1studio-install-directory\appserver7\uninstall.exe
```

4. WindowsNativeToolkit プロセスを停止して、対応するファイルを削除します。
 - a. Windows のタスクマネージャを使って WindowsNativeToolkit プロセスのインスタンスを検出し、これを終了します。
 - b. `%TEMP%\WindowsNativeToolkit_version-id.exe` の WindowsNativeToolkit ファイルを削除します。
5. `wincleanup.exe` ユーティリティを使って、デフォルトドメインや作成したインスタンスに対応するサービスを削除します。

- a. *s1studio-install-directory*\appserver7\bin\wincleanup.exe で wincleanup.exe ユーティリティを探します。

ユーティリティがこの場所にはない場合は、<http://forte.sun.com/ffj> からダウンロードできます。「IMPROVING PRODUCTIVITY」という見出しの下を探してください。

- b. wincleanup.exe を実行して、デフォルトのドメインサービスを削除します。

```
C:\> s1studio-install-directory\appserver7\bin\wincleanup.exe
```

- c. サービス (ドメインまたはサーバー) 名を引数として使用して、作成したほかのドメインやサーバーインスタンスについて、手順 b を繰り返します。

```
C:\> s1studio-install-directory\appserver7\bin\wincleanup.exe service-name
```

6. Windows の「レジストリエディタ」を使用して、以下のフォルダとその中身を Windows レジストリから削除します。
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sun Microsystems\Application Server
7. 以下のキーとその内容を削除します。
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\CurrentVersion\Uninstall\Sun ONE Application Server 7
8. %SystemRoot%\system32\ の productregistry ファイルから、アプリケーションサーバーエントリを削除します。
9. 「Sun Microsystems」 > 「Sun ONE Application Server 7」という「スタート」メニューのプログラムグループとその内容 (プログラム項目) を削除します。
10. 「Sun Microsystems」 > 「Sun ONE Studio 5 SE」という「スタート」メニューのプログラムグループとその内容を削除します。
11. *s1studio-install-directory* から製品ファイルを削除します。
12. システムを再起動して、システムのレジストリを整理します。

▼ 不完全なアンインストールを修正する (Solaris OS)

1. X サーバーへのクライアントアクセスを有効にします。

```
% xhost + your-local-machine
```

2. DISPLAY 環境変数をローカルシステムの表示に設定します。
たとえば、C シェルを使用している場合は、以下のように入力します。

```
% setenv DISPLAY your-local-machine:0.0
```

3. スーパーユーザーになります。
4. 「Solaris Product Registry」 ツールを開きます。

```
# /usr/bin/prodreg &
```

5. 「システムレジストリ」 ノードを展開し、「Sun ONE Application Server」 ノードを選択します。
6. 「アンインストール」 をクリックして指示に従います。
7. `s1studio-install-directory` に残っているファイルを削除します。

```
# rm -r s1studio-install-directory
```

注 – プログラムファイルとディレクトリは、この作業の最後の手順で削除します。

IDE インストーラによって以下の Solaris パッケージがインストールされています。

- SUNWasaco
- SUNWascmo
- SUNWasdbo
- SUNWasdmo
- SUNWasdvo
- SUNWaslco
- SUNWaso
- SUNWaspx
- SUNWasro

このリストを使って、すべてのファイルを削除したかどうかを確認してください。アンインストーラウィザードと「Solaris Product Registry」ツールでこれらのパッケージを削除できなかった場合は、手動でこれらを削除することが推奨されます。

8. X サーバーへのクライアントアクセスを使用不可にして、スーパーユーザー特権から抜けます。

```
# xhost - your-local-machine  
# exit
```

▼ 不完全なアンインストールを整理する (Linux システム)

1. スーパーユーザーになります。
2. インストールされているアプリケーションサーバーの rpm パッケージについて照会します。

```
# rpm -qa | grep SUNW
```

以下の一部または全部のパッケージが表示されます。

- SUNWasaco-7.0.0-0.0.0
- SUNWaso-7.0.0-0.0.0
- SUNWtls-3.3.2-0.0.0
- SUNWxsrt-7.0.0-0.0.0
- SUNWjhrt-7.0.0-0.0.0
- SUNWascmo-7.0.0-0.0.0
- SUNWjxap-7.0.0-0.0.0
- SUNWxrgrt-7.0.0-0.0.0
- SUNWasdmo-7.0.0-0.0.0
- SUNWicu-7.0.0-0.0.0
- SUNWasro-7.0.0-0.0.0
- SUNWjaf-7.0.0-0.0.0
- SUNWxrpcrt-7.0.0-0.0.0
- SUNWpr-4.1.2-0.0.0
- SUNWjmail-7.0.0-0.0.0
- SUNWaclg-7.0.0-0.0.0
- SUNWasdbo-7.0.0-0.0.0

- 上記に示された 17 のパッケージの中で、手順 2 のコマンドの出力で表示されたものをすべて削除します。

```
# rpm -e package-name
```

- インストールされている Message Queue パッケージをチェックします。

```
# rpm -qa | grep imq  
# imq-3.0.1-01
```

- 手順 4 で示されているように検出された場合は、Message Queue パッケージを削除します。

```
# rpm -e imq-3.0.1-01
```

- `/var/tmp/productregistry` を `/var/tmp/productregistry.BACKUP` にリネームします。

- `rm -rf` コマンドを使って、以下のディレクトリを削除します。

- `/var/opt/imq`
- `/etc/opt/imq`
- `/var/opt/SUNWappserver7`
- `/etc/opt/SUNWappserver7`
- `/tmp/*admin*`
- `/tmp/*domain*`
- `/tmp/*server*`

- `s1studio-install-directory` を削除します。

```
$ rm -rf /s1studio-install-directory
```

- スーパーユーザー特権から抜けます。

付録 A

Solaris 8 OS パッチの番号と説明

表 A-1 は、Sun ONE Studio 5, Standard Edition `solaris_patch_installer` に含まれている、Solaris 8 OS のパッチに関する情報 (パッチ番号および説明) です。これらのパッチは、この表に示されている順序でインストールする必要があります。この理由から、システムにこれらのパッチをインストールするときは `solaris_patch_installer` スクリプトを使用することが推奨されます。

表 A-1 Solaris 8 OS パッチの番号と説明

パッチ ID	説明
110380-04	ufssnapshots サポート、libadm パッチ
110934-10	pkgtrans、pkgadd、pkgchk、および libpkg.a パッチ
112396-02	/usr/bin/fgrep パッチ
108987-13	patchadd および patchrm のパッチ
111310-01	/usr/lib/libdhcpagent.so.1
111293-04	/usr/lib/libdevinfo.so.1
111111-03	/usr/bin/nawk パッチ
108528-20	SIGEMT
111023-02	/kernel/fs/mntfs および /kernel/fs/sparcv9/mntfs パッチ
110386-03	RBAC 機能のパッチ
108989-02	アカウントिंग
108652-66	Xserver
112003-03	フォントセット
111308-03	/usr/lib/libmtmalloc.so.1 パッチ
109326-09	セキュリティ、libresolv poll()
109147-22	Solaris 8 インタープロシージャオプティマイザ

表 A-1 Solaris 8 OS パッチの番号と説明 (続き)

パッチ ID	説明
108993-18	LDAP2 パッチ
108940-51	Motif 1.2.7 および 2.1.1: Solaris 8 OS の実行時ライブラリパッチ
108921-16	CDE 1.4 dtwm
108773-17	X 入力メソッド

SunSolve Patch Support ポータルサイト (<http://sunsolve.Sun.com/pub-cgi>) で、これらのパッチに関する追加情報を参照できます。

付録 B

IDE におけるポート使用

表 B-1 は、Sun ONE Studio IDE で使用されているポートをまとめています。一覧には、IDE で使用される IDE モジュール、他社製のコンポーネント、アプリケーションサーバーが使用するポートが含まれています。また、デフォルトのポート割り当てを変更できるかどうかに関する情報もあります。

複数のアプリケーションサーバーを使用している場合やマルチユーザー環境で IDE を使用している場合は、ポートの衝突が発生することがあります。ポートの衝突が発生した場合は、この表のポート割り当ての変更方法を参照してください。

表 B-1 Sun ONE Studio 5, Standard Edition IDE におけるポート使用

モジュール、アプリケーションサーバー、他社製のコンポーネント	デフォルトのポート割り当て	説明	デフォルトのポート割り当ての変更方法
NetBeans Open File モジュール	7318	オープンファイルサーバー	<ol style="list-style-type: none">IDE のメインウィンドウから「ツール」→「オプション」を選択します。「IDE 構成」ノードを展開します。「サーバーと外部ツールの設定」ノードを展開します。「オープンファイルサーバー」を右クリックし、コンテキストメニューから「プロパティ」を選択します。「ポート」プロパティを選択して、別のポート番号を入力します。
NetBeans Internal HTTP サーバーモジュール	8082	内部サーバー HTTP	競合が検出されると、デフォルトのポート割り当てが自動的に変更されます。
PointBase Restricted Edition	9092		IDE で、「ツール」→「PointBase」→「構成」を選択し、ポート番号を設定します。

表 B-1 Sun ONE Studio 5, Standard Edition IDE におけるポート使用 (続き)

モジュール、アプリケーションサーバー、他社製のコンポーネント	デフォルトのポート割り当て	説明	デフォルトのポート割り当ての変更方法
Internal JWSDP Tomcat	8015	サーバー管理	<ol style="list-style-type: none"> 「エクスプローラ」の「実行時」タブで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。 「Tomcat 4.0」ノードを展開し、「Internal JWSDP (内部 JWSDP)」ノードを右クリックして、コンテキストメニューから「プロパティ」を選択します。 「サーバーポート」プロパティを選択して、使用するポート番号を入力します。
	8081	サーバー HTTP	<ol style="list-style-type: none"> 「エクスプローラ」の「実行時」タブで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。 「Tomcat 4.0」ノードを展開し、適切なインストールのノードを展開します。 編集対象のホストを表すノードを右クリックし、コンテキストメニューから「プロパティ」を選択します。 「HTTP Connector (HTTP コネクタ)」プロパティフィールドを選択して、使用するポート番号を入力します。
	8443	リダイレクト	<p><code>s1studio-user-dir/JWSDP_base/conf/server.xml</code> を変更します。</p> <p>その場合は、注意して <code>server.xml</code> を編集してください。手動での編集を開始する前に、必ず現行の <code>server.xml</code> のバックアップコピーを作成してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 「エクスプローラ」の「実行時」タブで、「インストールされているサーバー」ノードの下の「Tomcat 4.0」ノードを展開します。 編集するインストール済み Tomcat のノードを右クリックします。コンテキストメニューから「構成する (<code>server.xml</code>)」を選択します。 <p>ソースエディタに <code>server.xml</code> ファイルが表示されます。<code>server.xml</code> を編集して、デフォルトのポート番号を変更できます。</p>
11555	IDE デバッガ 接続	<ol style="list-style-type: none"> 「エクスプローラ」の「実行時」タブで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。 「Tomcat 4.0」ノードを展開し、「Internal JWSDP」ノードを右クリックして、コンテキストメニューから「プロパティ」を選択します。 「デバッガ」タブを選択します。 「デバッガポート」プロパティを選択して、使用するポート番号を入力します。 	

表 B-1 Sun ONE Studio 5, Standard Edition IDE におけるポート使用 (続き)

モジュール、アプリケーションサーバー、他社製のコンポーネント	デフォルトのポート割り当て	説明	デフォルトのポート割り当ての変更方法
Java Web Services Developer Pack UDDI Server (IDE にバンドル)	8095	レジストリサーバー用の Tomcat サーバーポート	<ol style="list-style-type: none"> 1. テキストエディタで <code>s1studio-install-directory/jwsdp/uddi_base/conf/server.xml</code> ファイルを開きます。 2. ポート番号を変更します。 3. IDE を再起動します。
	8089	レジストリサーバー用の Tomcat HTTP ポート	<ol style="list-style-type: none"> 1. テキストエディタで <code>s1studio-install-directory/jwsdp/uddi_base/conf/server.xml</code> ファイルを開きます。 2. ポート番号を変更します。 3. IDE を再起動します。
	4080	Xindice HTTP	<ol style="list-style-type: none"> 1. テキストエディタで <code>s1studio-install-directory/jwsdp/tools/xindice/config/system.xml</code> ファイルを開きます。 2. ポート番号を変更します。 3. IDE を再起動します。
WebLogic 6.1 WebLogic 7.0	7001	サーバー HTTP	デフォルトのポート番号は、WebLogic サーバーのインストール中に変更できます。WebLogic を使用するときは、IDE の「エクスプローラ」の「実行時」タブで WebLogic サーバーインスタンスの「ポート」プロパティに適切な値が設定されていることを確認してください。
	7002	サーバー HTTPS	デフォルトのポート番号は、WebLogic サーバーのインストール中に変更できます。WebLogic を使用するときは、IDE の「エクスプローラ」の「実行時」タブで WebLogic サーバーインスタンスの「ポート」プロパティに適切な値が設定されていることを確認してください。
Sun ONE Application Server 7 Solaris Integrated and Solaris Supported Edition	4848	サーバー管理 HTTP	詳細はサーバーインストールに関する資料 (http://docs.sun.com/source/816-7145-10/index.html) を参照してください。
	80	HTTP Web サーバー	詳細については、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』と『Sun ONE Application Server 7 Standard Edition インストールガイド』を参照してください。Sun ONE Application Server 7 のマニュアルは、 http://docs.sun.com/ から入手できます。

付録 C

IDE のサブディレクトリ

この付録では、*s1studio-install-directory* にインストールされるサブディレクトリについて説明します。また、インストール時に作成され、ユーザー固有の情報を格納するために IDE が使用するユーザーディレクトリについても説明します。

インストールサブディレクトリ

表 C-1 は、IDE の *s1studio-install-directory* にあるサブディレクトリについて説明しています。Solaris および Linux システムでは、Sun ONE Application Server 7 のインストールに追加のディレクトリが使用されます。詳細は、<http://docs.sun.com/> から『Sun ONE Application Server 7 Standard Edition インストールガイド』を参照してください。

表 C-1 Sun ONE Studio 5 のインストールサブディレクトリ

サブディレクトリ	説明
<code>_uninst</code>	IDE のアンインストールに使用されるファイルが含まれる
<code>appserver_inst</code>	Sun ONE Application Server 7 のインストールに関する情報ファイル
<code>appserver7</code>	Sun ONE Application Server 7 ファイルが含まれる
<code>bin</code>	IDE の起動およびユーティリティの実行可能ファイル、IDE の構成、セキュリティポリシーが含まれる
<code>docs</code>	Sun ONE Studio 5 のヘルプファイルと、その他の各種ドキュメントが含まれる
<code>examples</code>	Sun ONE Studio 5 ソフトウェアのいくつかの主要機能を紹介するソースファイルが含まれる

表 C-1 Sun ONE Studio 5 のインストールサブディレクトリ (続き)

サブディレクトリ	説明
jwsdp	Java Web Services Developer Pack 用のファイルとディレクトリが含まれる
lib	IDE 実装の中核となる JAR ファイルと、オープン API が含まれる
modules	Sun ONE Studio 5 モジュールを JAR ファイルとして格納する
sources	ライブラリのソースが含まれる。これらのソースは、ユーザーアプリケーションと一緒に再配布することができる
system	IDE が特別な目的に使用するファイルとディレクトリが含まれる
update_tracking	アップデートセンターが使用する情報が含まれる

IDE ユーザーサブディレクトリ

IDE は、ユーザー固有のデータをユーザーディレクトリに格納します。この例としては、PointBase サーバー、UDDI レジストリサーバー、および Tomcat といった個人用開発サーバーの IDE 設定やオプションなどの必要な実行時データがあげられます。ユーザーディレクトリには `ide.log` ファイルも含まれます。このファイルは技術サポートを受けるときに有用な情報を提供します。

- Microsoft Windows システムの場合、このディレクトリのデフォルトの場所は `C:\Documents and Settings\user-id\studio5se_user` になります。
- Solaris または Linux システムの場合、ディレクトリのデフォルトの場所は `$HOME/studio5se_user` になります。

初期インストール時にこのディレクトリには最小 5.5M バイトの空き領域が必要です。実際の使用量は IDE 内で使用されるコンポーネントによって異なります。

付録D

IDE インストール用のコマンド行オプション

この付録では、IDE をインストールするためのコマンド行オプションについて説明します。コマンド行オプションは、主に以下の4つの理由から使用します。

- J2SE プラットフォームの標準以外の場所を指定する。詳細は100 ページの「J2SE プラットフォームの場所の指定」を参照してください。
- 標準以外の一時空き領域ディレクトリの場所を指定する。詳細は101 ページの「一時空き領域ディレクトリの場所の指定」を参照してください。
- デバッグを補佐するエラーメッセージのログファイルを指定する。詳細は101 ページの「エラーメッセージのログファイルの指定」を参照してください。
- サイレントモードでインストールする。詳細は101 ページの「サイレントモードでの IDE のインストール」を参照してください。

GUI インストーラで使用されるコマンド行オプション

GUI インストーラファイルでは3つのコマンド行オプションを使用できます。表 D-1 は、これらのオプションについてまとめています。

表 D-1 GUI インストーラで使用されるコマンド行オプション

オプション	説明
<code>-is:tempdir pathname</code>	一時空き領域に使用するディレクトリを指定する。これはインストーラが正常に動作するだけの十分な空き領域がシステムのデフォルトにない場合に使用される
<code>-is:javahome pathname</code>	J2SE プラットフォームの場所を指定する。J2SE プラットフォームが標準以外の場所にインストールされている場合に有用
<code>-is:log log.txt</code>	ログファイル <code>log.txt</code> にエラーメッセージを出力するようにインストーラに指示する

J2SE プラットフォームの場所の指定

- インストーラが J2SE プラットフォームを検出しない場合は (これは J2SE プラットフォームが標準以外の場所にインストールされている場合に起こります)、コマンド行からインストーラを起動し、`-is:javahome` オプションを使って J2SE プラットフォームへのパスを指定できます。
- たとえば、Microsoft Windows システムの場合は、以下のように入力します。

```
C:\> \s1studio-download-directory\s1s5se-win-ml.exe -is:javahome C:\j2se-directory
```

変数 `j2se-directory` は、J2SE がインストールされている場所で置き換えてください。

一時空き領域ディレクトリの場所の指定

デフォルトの一時空き領域ディレクトリにインストーラを実行するだけの十分な空き領域がない場合は、コマンド行からインストーラを起動し、`-is:tempdir` オプションを使って十分な空き領域がある別のディレクトリを指定できます。

```
C:\> \s1studio-download-directory\s1s5se-win-ml.exe -is:tempdir C:\temporary-directory
```

エラーメッセージのログファイルの指定

インストール時に発生する問題に対してさらに障害追跡が必要な場合は、`-is:log log.txt` オプションを使ってインストーラを実行できます。このオプションによって、`log.txt` ファイルにエラーメッセージを出力するようにインストーラに指示します。

```
C:\> \s1studio-download-directory\s1s5se-win-ml.exe -is:log log.txt
```

サイレントモードでの IDE のインストール

`-silent` オプションをコマンド行に指定することで、サイレントモードという非対話型のモードでインストーラを実行できます。このオプションは、端末ウィンドウに GUI が表示されるのを抑制します。サイレントモード (非対話型モード) で IDE をインストールする手順は、CD-ROM のファイルを使ってインストールするか、Web サイトからダウンロードしたファイルを使ってインストールするかによって異なります。

- Web サイトからインストーラファイルをダウンロードした場合は、コマンド行インストールオプションを含むファイルを作成し、インストーラ起動ツールを使用します。インストーラ起動ツールとオプションファイルは同じディレクトリに置く必要があります。詳しくは102 ページの「Web ダウンロードを使ったサイレントモードのインストール」を参照してください。
- CD-ROM を使用する場合は、コマンド行にオプションを入力してインストーラの JAR ファイルを起動します。JAR ファイルは CD-ROM でのみ提供されています。詳しくは105 ページの「CD-ROM を使ったサイレントモードのインストール」を参照してください。

Web ダウンロードを使ったサイレントモードのインストール

使用したいコマンド行オプションを含むファイルを作成し、このファイルを *s1studio-download-directory* に置きます。それから、`-silent` オプションを使ってコマンド行からインストーラを起動します。以下の例では、Solaris OS 上でコマンド行からサイレントモードで IDE をインストールする手順を示します。

▼ Web ダウンロードを使ってサイレントモードでインストールする (Solaris OS)

1. テキストエディタで、ダウンロードした `s1s5se-sol-sparc-ml.bin` インストーラ起動ツールを保存した *s1studio-download-directory* に `s1s5se-sol-sparc-ml.sp` ファイルを作成します。

最低 3 つの必須オプションを引用符で囲んで含めてください。たとえば、`.sp` ファイルは以下ようになります。

```
installDir="/opt/studio5_se"  
jdkHome="/usr/j2se"  
serialNumber="trial"
```

ほかのインストールオプションについては、表 D-2 を参照してください。

表 D-2 サイレントモードによるインストールのコマンド行オプション

オプション - 短縮名	オプション - 長い名前	説明
id	installDir	IDE のインストール先のディレクトリを指定します。 <code>-silent</code> モードでの必須オプションです。
jh	jdkHome	IDE と組み合わせる対応 J2SE バージョンの場所を設定します。 <code>-silent</code> モードでの必須オプションです。
sn	serialNumber	IDE のライセンスシリアル番号を設定します。 <code>-silent</code> モードでの必須オプションです。

表 D-2 サイレントモードによるインストールのコマンド行オプション (続き)

オプション - 短縮名	オプション - 長い名前	説明
-np	noPointBaseFound	Sun ONE Application Server 7 がすでにインストールされている場合の動作を指定します。 useExistingAppserver は、インストール済みのアプリケーションサーバーが検出されても IDE のインストールを継続することをインストーラに指示します。 reinstall は、PointBase サーバーなしで Sun ONE Application Server 7 の既存インストールが検出された場合は終了するようにインストーラに指示します。 このオプションは、Sun ONE Application Server 7 が PointBase サーバーなしでシステムにすでにインストールされている場合のみ有効です。
ps	proxyServer	-DportNumber オプションとともにプロキシサーバー名とポート番号のレジストリ設定を指定します。
pn	portNumber	-DproxyServer オプションとともにプロキシサーバー名とポート番号のレジストリ設定を指定します。これらのオプションは、IDE を使っていつでも設定できます。コマンド行でのこれら 2 つのオプションの指定は省略可能です。ただし、指定する場合は、両方とも指定することが必要です。これらのオプションは、IDE で「設定ウィザード」を使っていつでも設定できます。詳しくは第 5 章を参照してください。

2. X サーバーへのクライアントアクセスを有効にします。

```
% xhost + your-machine-name
```

your-machine-name には、使用するマシンのホスト名を指定してください。

3. ローカルマシンに表示されるように表示環境変数を設定します。

```
% setenv DISPLAY your-machine-name:0.0
```

4. スーパーユーザーになります。

5. コマンド行からインストーラ起動ツールを起動します。

```
# cd s1studio-download-directory
# s1s5se-sol-sparc-ml.bin -silent
```

インストーラは `s1s5se-sol-sparc-ml.sp` ファイルに指定されたオプションを使って IDE をインストールし、コマンドプロンプトウィンドウに以下を表示します。

```
InstallShield Wizard
InstallShield Wizard を初期化中です...
Java(tm) 仮想計算機を検索中です...
.....
InstallShield Wizard を実行中です...
```

6. インストールが完了したら、`s1studio-install-directory` にあるログファイル `install.log` を確認します。
7. クライアントアクセスを使用不可にして、スーパーユーザー特権から抜けます。

```
# xhost - your-machine-name
# exit
```

▼ Web ダウンロードを使ってサイレントモードでインストールする (Microsoft Windows)

以下の例では、Microsoft Windows システムでコマンド行からサイレントモードで IDE をインストールする手順を示します。

1. テキストエディタで、ダウンロードした `s1s5se-win-ml.exe` インストーラ起動ツールを保存した `s1studio-download-directory` に `s1s5se-win-ml.sp` ファイルを作成します。

必須オプションを引用符で囲んで含めてください。たとえば、`.sp` ファイルは以下のようになります。

```
installDir="C:\Sun\studio5_se"
jdkHome="C:\j2sdk1.4.1_02"
serialNumber="trial"
```

ほかのインストールオプションについては、表 D-2 を参照してください。

2. コマンド行からインストーラ起動ツールを起動します。

```
C:\> cd s1studio-download-directory
C:\> s1s5se-win-ml.exe -silent
```

インストーラは `s1s5se-win-ml.sp` ファイルに指定されたオプションを使って IDE をインストールし、コマンドプロンプトウィンドウに以下を表示します。

```
InstallShield Wizard
InstallShield Wizard を初期化中です...
Java(tm) 仮想計算機を検索中です...
.....
InstallShield Wizard を実行中です...
```

CD-ROM を使ったサイレントモードのインストール

製品 CD-ROM を使用する場合は、インストーラの JAR ファイルを使い、コマンド行にオプションを直接入力できます。JAR ファイルを使ってインストールするには、`-silent` オプションを使用してコマンド行にインストールオプションを入力します。3つの必須オプションを含めてください。この手順は、Web サイトからダウンロードした `.bin` インストーラ起動ツールでは使用できません。

コマンド行にオプションを直接入力すると、インストーラは Java 大域変数指定オプション (`-D`) を使ってインストーラスクリプトに情報を渡します。

たとえば、Microsoft Windows システムの場合は、コマンドプロンプトウィンドウに以下を入力します。

```
C:\> java -Did="C:\s1studio-install-directory" -Djh="C:\j2sdk1.4.1_02"
-Dsn="trial" -jar D:\installers_se\s1s5se-win-ml.jar -silent
```

この例で、それぞれのオプションは以下を指定しています。

- `-Did` は、使用するインストールディレクトリ
- `-Djh` は、J2SE の場所を指定
- `-Dsn` は、試用シリアル番号の生成をインストーラに指示
- `D:` は、製品 CD が挿入された CD-ROM ドライブ

Solaris OS システムの場合は、以下を入力します。

```
# cd <cdrom-path>/installers_se
# java -Did="s1studio-install-directory" -Djh="/usr/j2se" -Dsn="trial"
-jar s1s5se-sol-sparc-ml.jar
```

値は必ず引用符で囲んでください。オプションの一覧は表 D-3 を参照してください。

表 D-3 コマンド行インストールオプション

オプション - 短縮名	オプション - 長い名前	説明
-Did	-DinstallDir	IDE のインストール先のディレクトリを指定します。-silent モードを使用する場合の必須のコマンド行パラメータです。
-Djh	-DjdkHome	IDE と組み合わせる対応 J2SE バージョンの場所を設定します。インストーラは、この J2SE を使用するよう IDE を設定します。 -silent モードを使用する場合の必須のコマンド行パラメータです。
-Dsn	-DserialNumber	IDE のライセンスシリアル番号を設定します。 -silent モードを使用する場合の必須のコマンド行パラメータです。
-Dnp	-DnoPointBaseFound	Sun ONE Application Server 7 がすでにインストールされている場合の動作を指定します。 useExistingAppserverは、インストール済みのアプリケーションサーバーが検出されても IDE のインストールを継続することをインストーラに指示します。 reinstallは、PointBase サーバーなしで Sun ONE Application Server 7 の既存インストールが検出された場合は終了するようにインストーラに指示します。 このオプションは、Sun ONE Application Server 7 が PointBase サーバーなしでシステムにすでにインストールされている場合のみ有効です。
-Dps	-DproxyServer	-DportNumber オプションとともにプロキシサーバー名とポート番号のレジストリ設定を指定します。
-Dpn	-DportNumber	-DproxyServer オプションとともにプロキシサーバー名とポート番号のレジストリ設定を指定します。これらのオプションは、IDE を使っていつでも設定できます。 コマンド行でのこれら 2 つのオプションの指定は省略可能です。ただし、指定する場合は、両方とも指定する必要があります。これらのオプションは、IDE で「設定ウィザード」を使っていつでも設定できます。詳しくは第 5 章を参照してください。

以下の表に、3つのプラットフォームのインストーラファイル名を示します。

表 D-4 インストーラとコマンド行オプションのファイル名

ファイルの種類	Microsoft Windows	Linux	Solaris OS
Web インストーラ 起動ツール	s1s5se-win-ml.exe	s1s5se-linux-ml.bin	s1s5se-sol-sparc-ml.bin
CD-ROM インストーラ 起動ツール	s1s5se-win-ml.exe	s1s5se-linux-ml.bin	s1s5se-sol-sparc-ml.bin
JAR ファイル (CD のみ)	s1s5se-win-ml.jar	s1s5se-linux-ml.jar	s1s5se-sol-sparc-ml.jar
コマンド行オプション ファイル (インストーラ ファイルでのみ使用)	s1s5se-win-ml.sp	s1s5se-linux-ml.sp	s1s5se-sol-sparc-ml.sp

索引

A

asadmin ユーティリティ, 39

C

classpath

IDE を起動するためのオプション, 30

ConnectException エラー, 82

F

FileNotFoundException error, 79

H

helloStudio テストアプリケーション, 45

I

JDBC API

接続の設定, 49

IDE のアンインストール

Linux, 69

Solaris, 71

Windows, 67

障害追跡, 84

IDE のインストール

Linux, 15

Microsoft Windows, 12

オプション, 102

コマンド行オプション, 101

サイレントモード, 101

IDE の起動

Linux システム, 28

Microsoft Windows, 27

Solaris OS, 28

IDE の設定

Look & Feel, 31

インポート, 29

フォントサイズ, 31

IDE モジュール

更新, 63

使用可能にする, 30

IllegalArgumentException エラー, 83

J

J2SE プラットフォーム

javahome オプション, 100

アーカイブバージョン, 6

インストール, 7

確認, 6

java.lang.NoClassDefFoundError error, 76

JAXRPCContentListener エラー, 84

JDBC API

ドライバを使用可能にする, 53

IDE のインストール

Solaris, 22

L

Linux

サポートされるプラットフォーム, 3
必要な空き領域, 5

M

Microsoft Windows

サポートされるプラットフォーム, 3
必要な空き領域, 5

N

NoClassDefFoundError error, 76

P

PointBase

WebLogic での使用, 61
外部インストーラを使用可能にする, 52
起動, 54
クラスパス, 53
コマンド行オプション, 103
停止, 54
ユーザーデータの場所, 98
product.xml ファイルエラー, 77

R

RemoteException エラー, 82
runide, 28
runide.sh, 28
runidew, 28

S

Solaris 8 OS パッチ

インストーラスクリプト, 20
識別, 91
障害追跡, 74
適用, 19

Solaris OS

サポートされるプラットフォーム, 3
必要な空き領域, 5

Sun ONE Application Server 7

管理コンソール, 42
起動, 40
使用不可にする, 58

W

WebLogic

Java クラスパス, 61
外部 PointBase, 61
起動, 60
障害追跡, 84
デフォルトとして設定, 59
ネイティブライブラリ, 61
パスワード, 60
プラグインを使用可能にする, 58
マルチユーザー環境, 61

Web ブラウザ, 29

Web プロキシ設定, 29

X

XNodeException エラー, 83

あ

アップグレード
正規ライセンス, 65
アップデートセンター, 29
アンインストールの失敗
Windows システムでの判断, 68
アプリケーションサーバー
WebLogic, 57
起動, 40
デフォルト, 33, 60

- デフォルトの確認, 43
- アプリケーションの配備, 49
- アンインストールの失敗
 - Solaris OS システムでの判断, 72
 - Linux システムでの判断, 70
- 修正, 84

い

- 以前のリリース、サポート, 8
- 一時空き領域、要件, 4
- インストーラの問題
 - インストールしないで終了, 76
 - 継続不能エラー, 78
 - パッケージ不足エラー, 78
 - ハンガアップ, 76

う

- ウィザード
 - 設定, 29
 - 設定インポート, 29
 - 登録, 29

え

- エラーメッセージのログオプション, 101

か

- 管理サーバー, 33
 - 起動, 35
 - 追加, 40
 - 停止, 42
- 管理ドメイン
 - 作成, 37
 - 定義, 33
 - デフォルト, 33
- 管理ユーザーパスワード, 13, 17, 24, 39, 43

き

- 起動オプション, 30
- 共有サーバー, 33

こ

- コマンド行オプション
 - IDE の起動, 30
 - javahome, 100
 - log, 101
 - tempdir, 75, 101
 - インストール, 14, 18, 25
 - サイレントモードでのインストール, 101
 - 必須, 102, 105

さ

- サイレントモードでのインストール, 101
- サポートされていないプラットフォームのエラー, 77
- サポートされるプラットフォーム, 3
- サンプルアプリケーション
 - PointBase リソース, 51
 - サブディレクトリ, 97

し

- システム要件, 3
- 書体と記号について, x
- 使用可能にする
 - モジュール, 30
- 試用ライセンス, 64
- シリアル番号
 - アップグレード, 65
 - 確認, 12, 17, 24
 - コマンド行オプション, 102
 - 表示, 64

せ

- 設定インポートウィザード, 29

設定ウィザード、使用, 29

ち

チュートリアル、PointBase リソースを使用可能にする, 51

て

ディレクトリ

IDE ユーザー, 31, 98

アンインストール後, 70, 68, 72

インストールサブディレクトリ, 97

デフォルトの Linux インストール, 28

デフォルトの Solaris インストール, 28

デフォルトの Windows インストール, 13

データベース

IDE での使用, 49

Oracle, 55

Sun ONE Application Server 7 への接続, 53

障害追跡, 83

デフォルトアプリケーションサーバー, 33

デフォルトの管理ユーザーパスワード, 13, 17, 24, 43

と

登録ウィザード, 29

は

パスワード

「管理ユーザーパスワード」を参照

パッチ、Solaris 8 OS, 19, 91

パッチインストーラスクリプト

使用, 19

障害追跡, 74

ひ

必要な空き領域

Linux, 5

Microsoft Windows, 5

Solaris OS, 5

一時空き領域, 4

障害追跡, 75

パフォーマンスを改善するための, 80

ユーザーディレクトリ, 98

標準インストール、定義, 8

ふ

プロキシ構成, 63

プロキシ設定, 29

ほ

ポート番号

IDE での用法, 93 ~ 95

管理サーバーのデフォルト, 13, 17, 24

プロキシサーバー, 103

ま

マニュアル

PointBase, 54

Sun ONE Application Server 7, 34, 38, 97

も

モジュール

更新, 63

使用可能にする, 30

モジュールの更新, 63

ゆ

ユーザー設定, 8, 29

ユーザーディレクトリ

指定, 31

ら

- ライセンス
 - アップグレード, 65
 - 確認, 12, 17, 24
 - 試用, 64
 - 表示, 64
- ライセンスマネージャツール, 64

ろ

- ロギングオプション, 101

